佐久市埋蔵文化財調査報告書　第125集

一本柳遺跡群

西一本柳遺跡 XII

長野県佐久市岩村田西一本柳遺跡XII発掘調査報告書
（古墳時代後期～中世集落址）

2004. 12

井　上　寅　雄

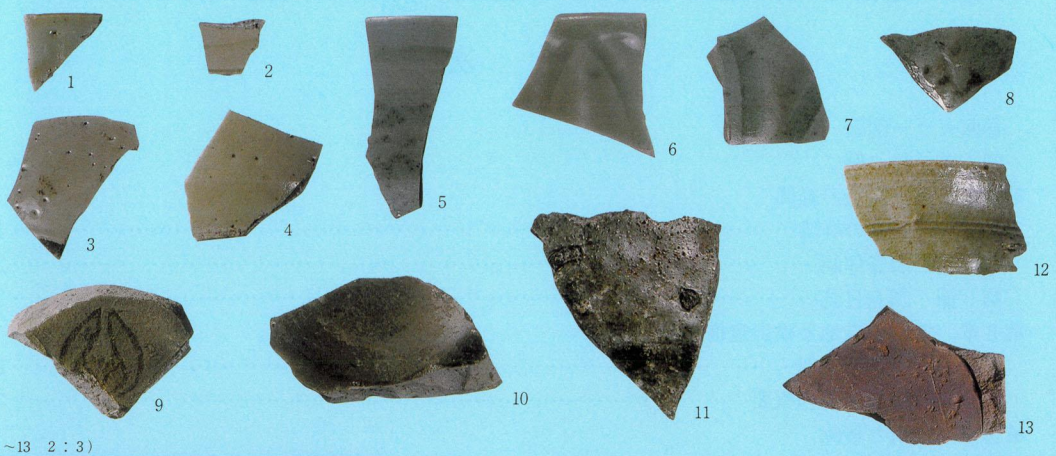
佐久市教育委員会

西一本柳遺跡XIIの調査について

西一本柳遺跡は佐久市のほぼ中央、湯川の段丘上に位置し、弥生のビーナス像とも呼ばれる優美な表情をもった『人面付土器』が出土した遺跡として有名です。近年、遺跡周辺は中央を国道141号バイパスが建設され、市内でも特に急速な変貌をとげている場所です。今回の発掘調査は西一本柳遺跡の中で12番目に調査された遺跡で、狭い範囲でしたが今まで周辺部で行われた調査成果と合わせると色々と重要な事が解ってきました。

今回の一番の調査成果は鎌倉時代から室町時代（13～14世紀）の人々の営みの痕跡が発見されたことです。発見されたものは、北側の道路部分の調査成果を含めると『竪穴状遺構』や『掘立柱建物址』と呼ばれる当時の家や小屋と考えられている建物跡や中国大陸で焼かれた青磁や白磁の碗、当時流通していた古銭、また壊れてはいますが硯が出土しました。これらの用具は当時の一般的な農民が使うもので無く、武士や僧侶或いは裕福な人々が所有していたと考えられています。

これらの事を考え合わせると本遺跡の南西300mの北西ノ久保地籍に所在する鎌倉中期頃の造営と考えられている墓所『北西ノ久保の石造塔婆群』と関係があるのかもしれません。いずれにしても、この地が中世において活発に人々が活動していた場所であったことは間違いないようです。



（1～13　2：3）

（14・15　1：1）

1－D3　白磁碗（12C後半）
2－D1　白磁碗
3－D15　白磁碗
4－D16　白磁碗
5－D1　龍泉窯青磁・画花文（12C後半）
6－一括　龍泉窯青磁・蓮弁文（13C代）
7－D8　龍泉窯青磁
8－Gr.オ－5　龍泉窯青磁
9－一括　龍泉窯青磁・牡丹文（13C代）
10－一括　龍泉窯青磁
11－一括　常滑
12－D15　古瀬戸　おろし皿（13C後半）
13－D20　硯
14－D1　「開元通寶」845
15－一括　「皇宋通寶」1038

例　　言

１．本書は、井上寅雄が行う集合住宅建設に伴う一本柳遺跡群西一本柳遺跡XIIの発掘調査報告書である。
２．調査委託者　　井上寅雄
３．調査受託者　　佐久市教育委員会
４．遺跡名及び所在地　　西一本柳遺跡XII（ＩＰＮXII）佐久市大字岩村田字下樋田1773－１他
５．調査期間及び面積　　発掘調査　　平成16年４月３日～平成16年４月26日
　　整理作業　　平成16年４月27日～平成17年２月28日
　　開発面積　1208㎡　　調査面積　280㎡
６．本遺跡の発掘及び整理作業・報告書執筆は冨沢が担当した。
７．本書及び当遺跡の出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

１．遺構の略記号は、住居址（Ｈ）・掘立柱建物址（Ｆ）・土坑（Ｄ）・溝状遺構（Ｍ）である。
２．挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。
　竪穴住居址・掘立柱建物址 1/80　土坑 1/80　土器 1/4　石器 1/3.2/3
３．遺構の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。
４．土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版　標準土色帖』に基づいた。
５．遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。
６．調査区グリットは公共座標の区割りに従い、間隔は４×４ｍに設定した。
７．遺構は支障がない限り調査時の番号をそのまま使用しているため、欠番や飛び番がある。

目　　次

巻頭カラー図版
例　言・凡　例
第Ⅰ章　発掘調査の経緯
　第１節　調査の経緯……1
　第２節　調査体制……2
　第３節　調査日誌……3
第Ⅱ章　遺跡の立地と検出遺構の概要
　第１節　遺跡の立地……2
　第２節　検出遺構の概要……4
第Ⅲ章　遺構と遺物
　第１節　竪穴住居址……5
　第２節　掘建柱建物址……9
　第３節　竪穴状遺構……10
　第４節　土　坑……16
　第５節　溝状遺構……17
　第６節　ピット……18

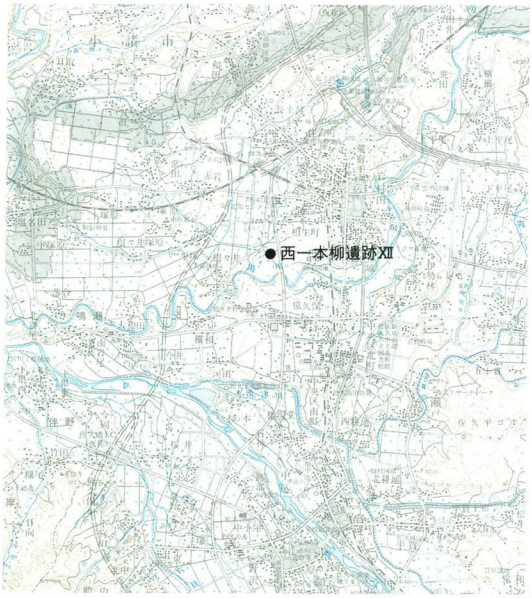
写真図版

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査の経緯

一本柳遺跡群は、佐久市岩村田地籍に所在し、東西方向に流れる湯川右岸の台地上にある。当遺跡群はこの台地上を東西方向に長く帯状に展開し、中央から西を西一本柳遺跡、東半分を東一本柳遺跡、北側を北一本柳遺跡とそれぞれ呼称する。昭和46年には遺跡群内に所在する東一本柳古墳が発掘調査され、石室内より金銅製の飾り馬具や鉄製の異形轡などが発見され注目を集めた。また、近年は遺跡群内を国道141号バイパスが南北に建設されると共に道路周辺部の開発によるこれらの発掘調査により西一本柳遺跡が市内でも有数の大複合遺跡であることが明らかにされつつある。

今回、遺跡群内に井上寅雄により共同住宅の建設が計画された。因って教育委員会では文化財保護法第57条の届出を受け試掘調査を行った。その結果遺構が発見され、保護協議がなされ遺跡破壊の恐れがある部分については記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。



第１図　西一本柳遺跡XII位置図（１：100000）

第２節　調査組織

調査主体者	佐久市教育委員会　教育長　髙柳　勉				
事　務　局	教育次長	赤羽根寿文			
	文化財課長	小林　正衛			
	文化財係長	髙村　博文			
	文化財係	林　幸彦	須藤　隆司	小林　眞寿	羽毛田卓也
		冨沢　一明	上原　学	赤羽根太郎	出澤　力
調査体制	調査担当者	冨沢　一明			
	調査員	柏木　義雄	小林よしみ	小山　功	島田　幹子
		橋詰　勝子	橋詰　信子	渡辺　長子	百瀬　秋男

第３節　調査日誌

４月３日	機械による表土剥ぎ開始
４月９日	遺構確認精査
４月12日	遺構掘り下げ・実測
４月23日	全体写真撮影
４月26日	現場終了
４月27日～	室内作業開始
	遺物洗浄・注記・接合
	遺物実測・遺物写真撮影
10月～12月	原稿を執筆して報告書を刊行

調査風景

第Ⅱ章　遺跡の立地と検出遺構の概要

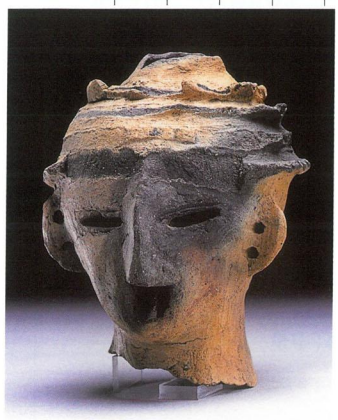
第１節　遺跡の立地

一本柳遺跡群は岩村田市街地より南西方向１kmの湯川北岸の河岸段丘に沿うように展開する遺跡群である。地形は東から西に緩やかに傾斜するほぼ平坦な地形である。標高は690m前後で、湯川との標高差は19mを測る。今回調査が行われた西一本柳遺跡XIIは遺跡群の中で西端にあたり、遺跡南は常木用水が走り、隣接する北西の久保遺跡と隔たっている。遺跡の土質は浅間の火山灰層と河川の氾濫による砂層が２次堆積したような混合土であり、水はけが非常によい土質である。よって遺跡周辺はほとんどか果樹及び畑作として利用されている。水田として利用されているのは、遺跡群北側の低地となる部分である。この耕作状況と重なるように畑作部分のみに古代の集落跡が展開している。

本遺跡周辺の調査された遺跡は非常に多く、かつ佐久地域にとって重要な発見がなされた遺跡が多い。まず本遺跡の西側に所在する五里田遺跡からは弥生時代中期から後期の集落と弥生後期の円形周溝墓が検出されている。また出土遺物としても銅釧・鉄釧はじめ鉄剣２振が出土している。次ぎに本遺跡西隣の北西の久保遺跡であるが、湯川に飛び出した舌状台地全面が発掘調査され弥生時代から中世に及ぶ複合遺跡が検出された。特に弥生後期の木棺墓８基と方形周溝墓１基が検出されており、近接する五里田遺跡の同時期の円形周溝墓との墓制の差異に興味が持たれる。また、古墳時代後期の円墳からは人物埴輪や家・太刀・盾・靫などの豊富な器財埴輪また鳥・鹿などの動物埴輪が出土しており、その特徴より群馬県側からの影響を指摘されている。これらは現在、市指定文化財に登録されている。

第２図　周辺遺跡位置図

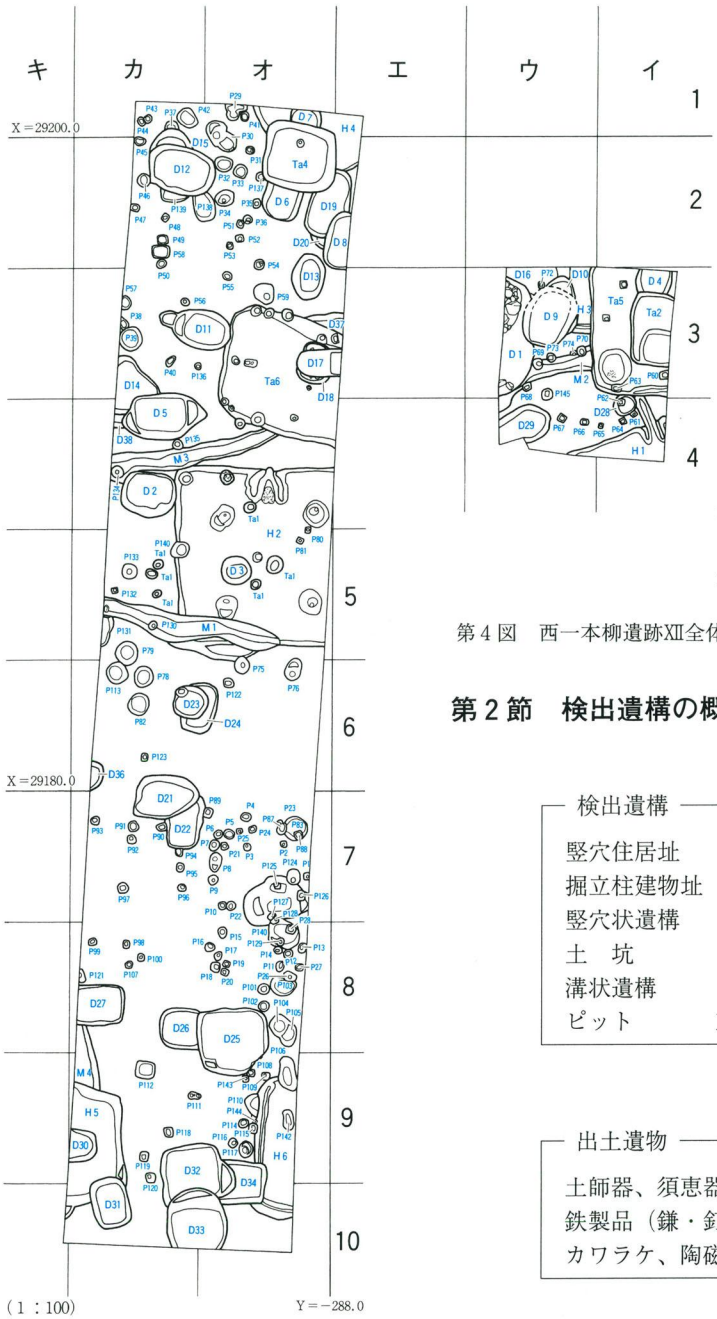
第３図　西一本柳遺跡Ⅷ・Ⅸ・Ⅻ調査図

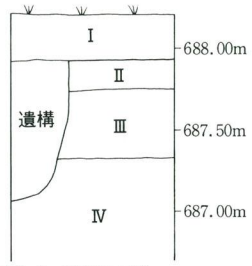


「人面付土器」

東一本柳古墳出土金銅製馬具

次に本遺跡の東側では、弥生時代中期の所産と考えられる「人面付土器」が西一本柳遺跡より出土している。この土器は壺の口縁部に人面を付けた一部と考えられるが、頸より下部が欠損しており全容は解らない。使用目的としては、頭部に円形の穴が有ること等から弥生前期に東日本に広がった再葬墓との関連が指摘されている。ただ、本資料は他の物に比べ顔の表情が写実的で尚かつその特徴から渡来系弥生人を表現したとも考えられている。一方、湯川を隔てた対岸の仲田遺跡からは土坑より弥生時代前期に比定される壺口縁部や遺跡からの出土としては希少な事例となる「花弁双蝶八花鏡」と呼ばれる奈良時代の鏡が住居址より出土している。最後に東一本柳古墳を上げたい。本古墳は昭和46年に発掘調査が行われ、径10mほどの小円墳であったが横穴式石室内より予想を遙かに越える副葬品が発見された。発見された品として鉄製の長楕円形鏡板付轡や金銅製の杏葉や飾金具、刀装具、耳環、勾玉、ガラス小玉がある。特に金銅製の杏葉や飾金具は見事な彫金が施されている。このように、西一本柳遺跡Ⅻの周辺部からは貴重な資料の発見かなされた遺跡が多く存在し、特に弥生時代中期から後期や古墳時代中期は佐久地域の中心的な集落が存在した可能性が指摘できる。





第Ⅰ層　褐灰色土（10YR 4/1）
しまり、粘性弱い。耕作土。

第Ⅱ層　灰黄褐色土（10YR 4/2）
しまり弱く、粘性ややあり。

第Ⅲ層　褐色土（10YR 4/6）
しまり、粘性弱い。小石と黄色砂の混合土。

第Ⅳ層　にぶい黄橙色土（10YR 6/3）
しまりややあり。粘性弱い。砂層。

第４図　西一本柳遺跡XII全体図及び標準土層

第２節　検出遺構の概要

検出遺構

竪穴住居址	６軒（古墳後期５、奈良１）
掘立柱建物址	２棟
竪穴状遺構	６基（中世）
土　坑	38基
溝状遺構	４本
ピット	145個

出土遺物

土師器、須恵器、磨石、凹石、
鉄製品（鎌・釘・刀子）
カワラケ、陶磁器類、土錘、硯、古銭、

標準土層

本遺跡の標準土層は４層に分かれる。遺構確認はⅡ層上面で耕作土直下で遺構の確認が行えた。各遺構の底部分は「湯川層」と呼ばれる二次堆積の砂層であり、調査時において崩落が激しく、ピット等の底面検出は難しかった。

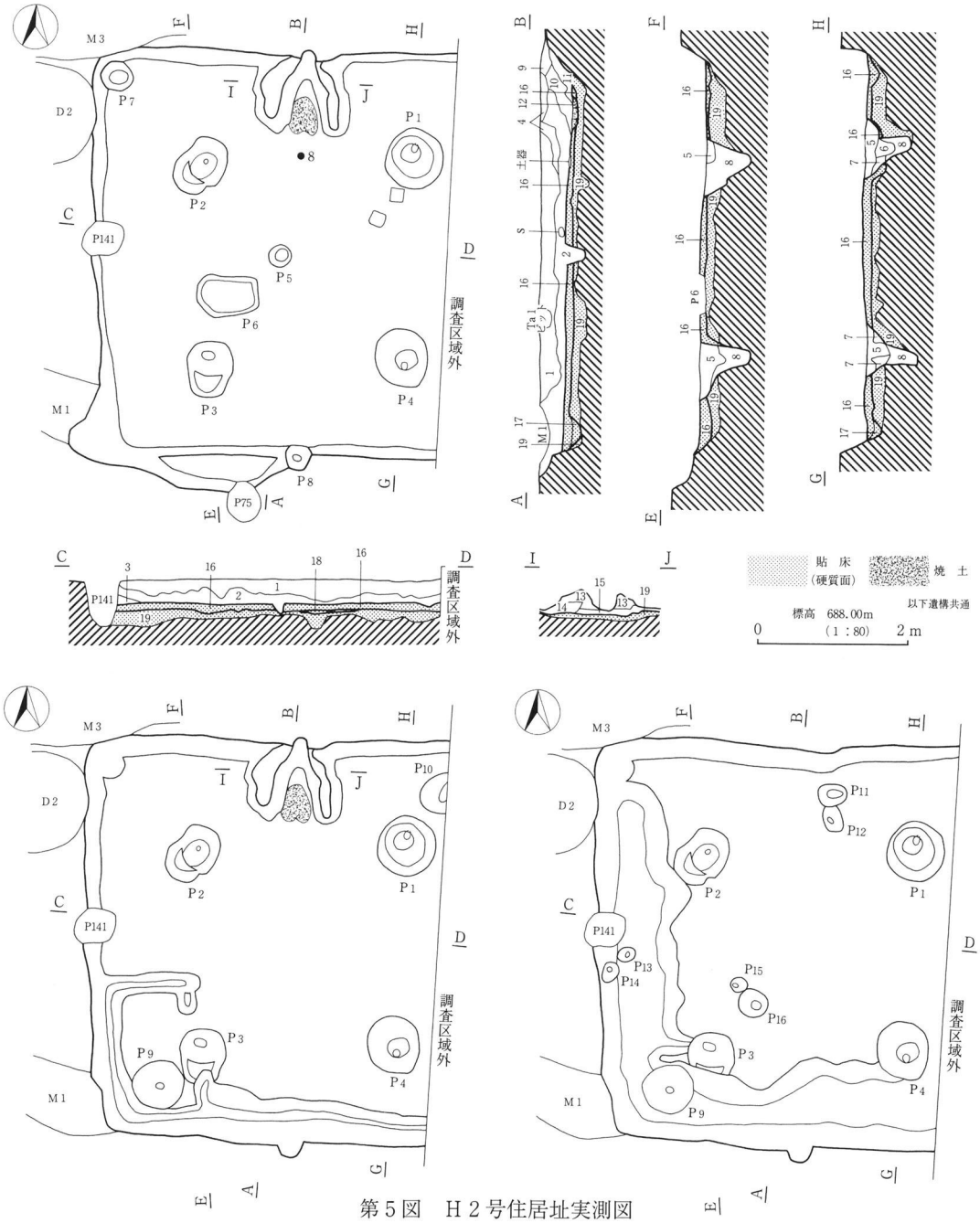
また、遺構覆土は主に黒色及び黒褐色土と褐灰色土であった。中世所産の遺構については覆土が褐灰色土であり、古代の住居址や土坑については黒色及び黒褐色土であり、覆土からほぼ所産時期認定が行えた。

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

（１）Ｈ２号住居址（第５、６図　写真図版二）

本住居址は、お－４・５、か－４・５Grに位置する。残存状態は良好であるが東壁は調査区外とな



第５図　Ｈ２号住居址実測図

る。重複遺構の内、本址が一番古い。形態はほぼ長方形を呈する。規模は検出北壁4.78m・検出南壁4.63m・西壁5.38mで、壁高さは南壁で40cmを測る。主軸方位はNを示す。床面積は検出部で21.9m²を測る。床は住居中央部が特に硬質で張り替えが確認された。壁溝は下部の床面で南壁と南西コーナーに「コ」の字状の間仕切り状溝が検出された。柱穴は16個が検出され、P1～P4が主柱穴と考えられる。カマドは北壁中央部にあり、白色粘土により構築されていた。

H2号住居址

1層　黒色土（10YR 2/1）
しまり、粘性弱い。小石を多く含む。

2層　黒褐色土（10YR 3/2）
しまりややあり。粘性弱い。黄色の粒子を多く含む。

3層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまり、粘性あり。黄色粒子を含む。1層に似る。

4層　黒色土（10YR 2/1）
しまりややあり。粘性あり。白色の粒子と焼土を含む。

5層　黒色土（10YR 2/1）
しまり、粘性弱い。

6層　黒色土（10YR 2/1）
5層よりも黒味が強く粘性あり。

7層　暗褐色土（10YR 3/3）
しまりあり。粘性弱い。黄色粒子を多く含む。

8層　褐色土（10YR 4/4）
しまりあり。粘性弱い。黒色土と黄色土の互層で一部にしまった部分あり。

（カマド）9層　黄褐色土（10YR 5/6）
しまり、粘性あり。焼土と白色粘土を多量に含む。

10層　にぶい黄橙色土（10YR 7/4）
しまり、粘性あり。白色の粘土層。

11層　赤色土（10R 4/6）
しまり弱く、粘性あり。焼土。

12層　明赤褐色土（2.5YR 5/8）
しまり、粘性弱い。火床面でよく焼けている。

（カマド袖）13層　灰白色土（10YR 7/1）
しまり、粘性あり。白色の粘土。

14層　灰黄褐色土（10YR 4/2）
しまり、粘性あり。黄色の砂を多く含む。

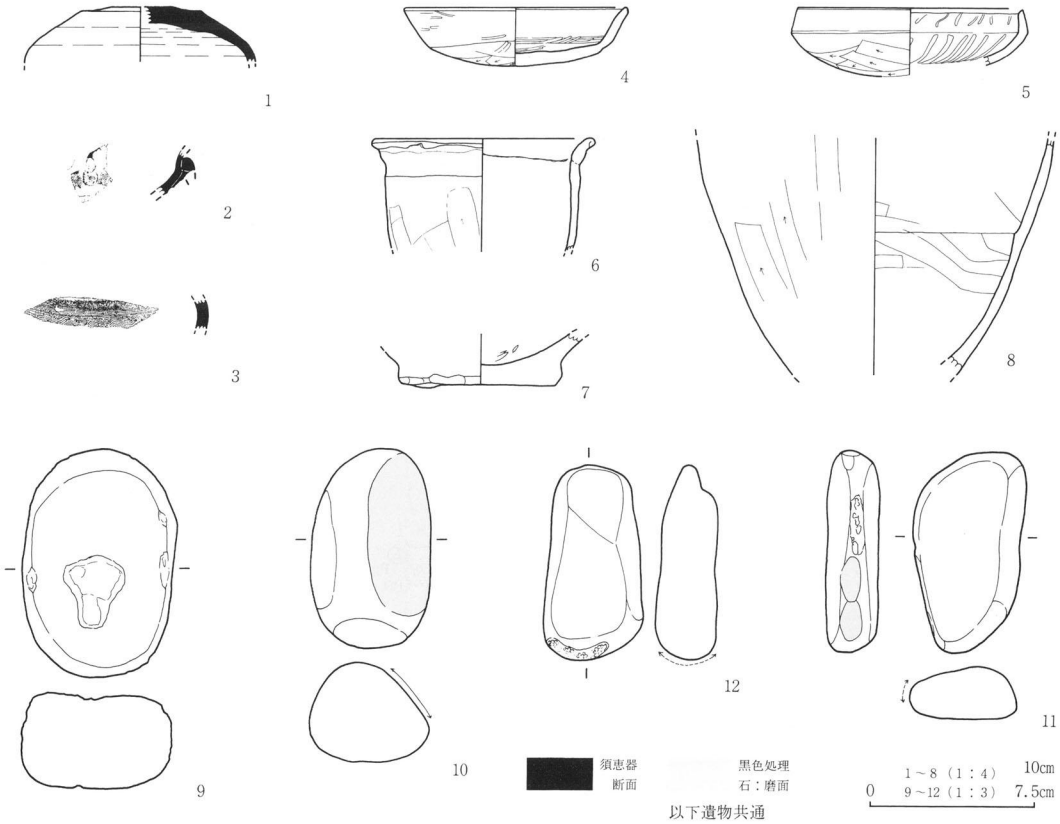
15層　黒色土（10YR 2/1）
しまり弱く、粘性あり。

（貼床）16層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまりあり。粘性弱い。上部に硬質面がある。小石を含む。

17層　黒褐色土（10YR 3/2）
しまり、粘性弱い。

18層　にぶい黄橙色土（10YR 6/3）
しまり、粘性あり。白色の粘土層。焼土を含む。

19層　黄褐色土（10YR 5/6）
しまり、粘性弱い。上部に硬質面がある。黒色土ブロックを多く含む。



第6図　H2号住居址出土遺物実測図

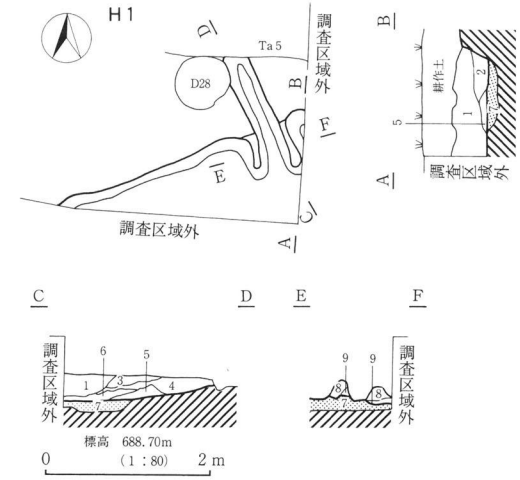
出土遺物は少なく、須恵器坏蓋・高坏や土師器坏・甕、磨石や敲石が出土した。本住居址はこれらの出土遺物より古墳時代後期Ⅱ・Ⅲ期（『西一本柳Ⅷ』第５章２節より）と考えられる。

（２）Ｈ１号住居址（第７図　写真図版二）

本住居址は、い－４、う－４Grに位置する。カマド及びカマド周辺部のみの検出である。重複遺構の内、本址が一番古い。規模は検出北壁3.22mで、壁高さは25cmを測る。主軸方位はＮ－24°－Ｗを示す。床面積は検出部で1.3m²を測る。床はカマド前が特に硬質であった。壁溝及びピットは検出されなかった。カマドは北壁中央部にあり、白色粘土により構築されていた。煙道部が住居址外にのびるタイプのものである。出土遺物は非常に少なく実測可能なものは無かったが、出土した須恵器甕や土師器甕・高坏破片の特徴から古墳時代後期の所産と考えられる。

（３）Ｈ３号住居址（第７、８図　写真図版二）

本住居址はい－３、う－３Grに位置する。住居址南東コーナーのみの検出である。重複遺構の内、



1層　黒色土（10YR 2/1）
しまりあり。粘性ややあり。軽石・ローム粒子を多く含む。

2層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまりあり。粘性弱い。

3層　暗褐色土（10YR 3/3）
しまり、粘性あり。焼土と粘土を多く含む。

4層　暗褐色土（10YR 3/4）
しまり、粘性あり。3層よりも、焼土・粘土を多く含む。煙道側にいくと、粘土が少ない。

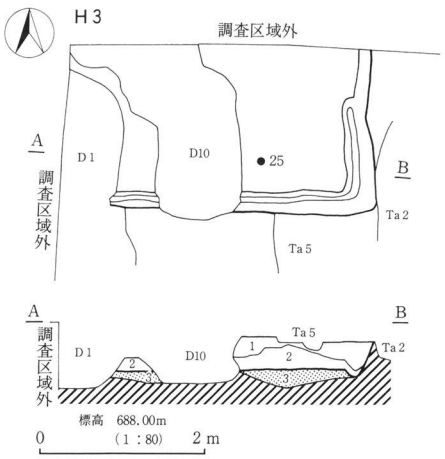
5層　暗赤褐色土（2.5YR 3/6）
しまり、粘性あり。焼土層で、炭化物を少量含む。

6層　黒色土（10YR 2/1）
しまりあり。粘性弱い。焼土を微量含む。

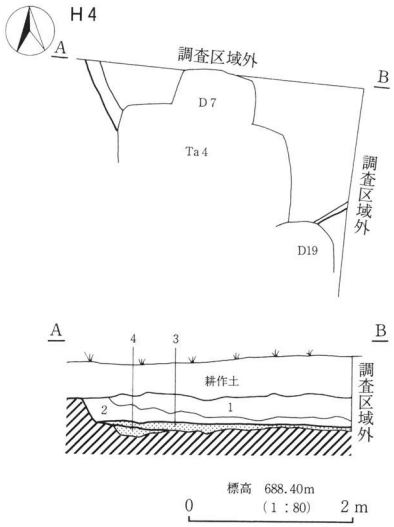
（貼床）7層　黒色土（10YR 2/1）
しまりあり。粘性弱い。硬質ブロック化しており、一部に焼土を含む。

（カマド袖）8層　赤褐色土（10R 4/4）
しまり、粘性あり。焼土を少量含む。

9層　暗赤色土（10R 3/4）
しまり弱い。粘性あり。焼土ブロックを多く含む。



1層　黒褐色土（10YR 2/2）しまり、粘性ややあり。軽石やや含む。
2層　黒褐色土（10YR 2/3）しまり、粘性ややあり。地山砂、小石を含む。
3層　褐色土（10YR 4/6）貼床。しまり、粘性あり。



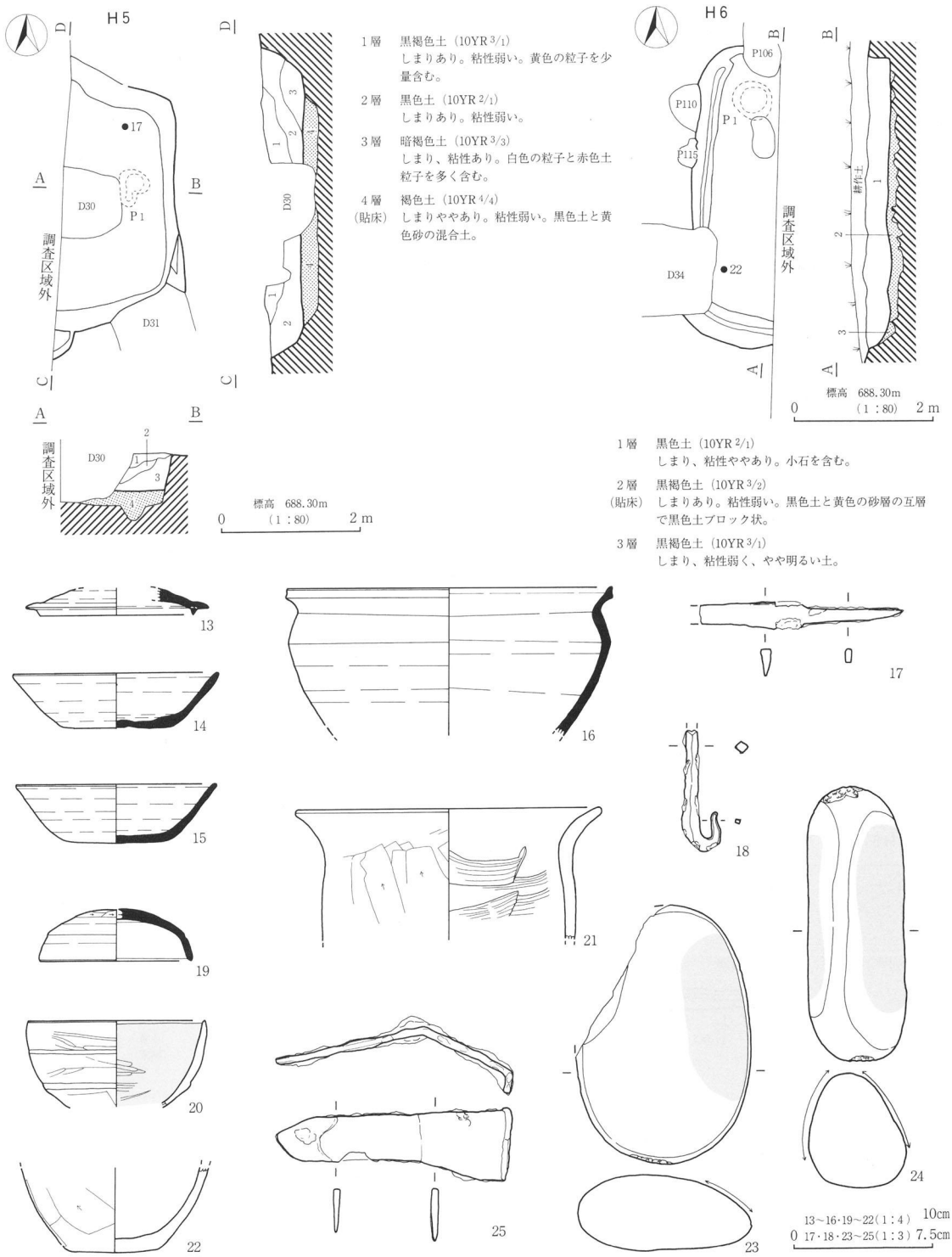
1層　黒褐色土（10YR 3/2）
しまり、粘性弱い。小石を多く含む。

2層　黒色土（10YR 2/1）
しまりややあり。粘性弱い。一部に白色の粘土を含む。

3層（貼床）　褐色土（10YR 4/4）
しまりあり。粘性弱い。黄色砂と黒色土の混合土。硬質化している。

4層（貼床）　褐色土（10YR 4/4）
3層よりもやわらかい。下層に黄色土砂を多く含む。

第７図　Ｈ１・３・４号住居址実測図



第８図　Ｈ５・６号住居址及びＨ３・５・６号住居址出土遺物実測図

本址が一番古い。規模は検出南壁3.23、検出東壁1.95mで、壁高さは40cmを測る。床面積は検出部で6.2㎡を測る。床は硬質であった。壁溝は南東コーナー部で検出され、幅40cm・深さ10cmであった。本址からの出土遺物は小片の土器が多く、25の鎌のみ提示した。この鎌は床面より浮いた状態で出土し、刃部の途中から意図的に折り曲げたような状態であった。本址の所産時期は不確実部分もあるが出土土器片の特徴から古墳時代中期後半の可能性がある。

（4）Ｈ４号住居址（第７図　写真図版二）

本住居址は、え－１・２、お－１・２Grに位置する。住居址南西コーナー周辺部のみの検出である。重複遺構の内、本址が一番古い。規模は検出南壁0.42m、検出西壁0.95mで、壁高さは29cmを測る。主軸方位はＮ－25°－Ｗを示す。床は全体に軟質であった。壁溝及びピットは検出されなかった。出土遺物は非常に少なく実測可能なものは無かったが、出土した須恵器甕や土師器甕・高坏破片の特徴から古墳時代後期の所産と考えられる。

（5）Ｈ５号住居址（第８図　写真図版三）

本住居址は、か－９、き－９・10Grに位置する。住居址東半分のみの検出である。重複遺構の内、Ｍ４号溝状以外本址が一番古い。規模は検出北壁1.57m、検出南壁1.65m、東壁2.70mで、壁高さは54cmを測る。主軸方位はＮを示すと考えられる。床は全体に軟質であった。ピットは掘り方検出時に１個が検出された。カマドは北壁付近の一部で床に広がる粘土が検出されたことから北壁側にあると考えられる。出土遺物は図示した物の他にいわゆる「武蔵甕」の破片や須恵器甕片がある。13は返りのついた須恵器蓋、14・15は須恵器坏、16は須恵器鉢、17・18は鉄製品である。本址はこれらの出土遺物の特徴より奈良時代後半の所産と考えられる。

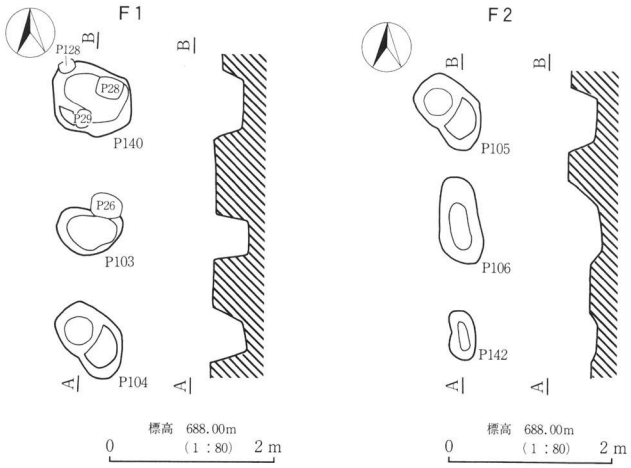
（6）Ｈ６号住居址（第８図　写真図版三）

本住居址は、お－９・10Grに位置する。住居址西半分のみの検出である。重複遺構の内、本址が一番古い。規模は検出北壁0.97m、検出南壁1.25m、西壁3.80mで、壁高さは33cmを測る。床は全体に軟質であった。ピットは床面と掘り方検出時に２個が検出された。遺物は覆土中からの出土が多かった。19は須恵器坏蓋、20は土師器坏で内面黒色処理されている。21・22は土師器甕、23は磨石、24は磨石と敲石の両方の機能をもった石である。本址はこれらの出土遺物の特徴より古墳時代後期Ⅱ・Ⅲ期（『西一本柳Ⅷ』第５章２節より）と考えられる。

第２節　掘立柱建物址

（1）Ｆ１号掘立柱建物址（第９図）

本址はお－８Grに位置する。梁間のみの検出で東西方向に桁行があると考えられる。梁間は3.10mを測る。出土遺物はＰ103より古墳後期の土師器甕・高坏片、Ｐ104より武蔵甕片が出土している。本址の所産時期は不確実であるが古代と考えられる。



第９図　Ｆ１・２号掘立柱建物址実測図

（２）Ｆ２号掘立柱建物址（第９図）

本址は、お－８・９Grに位置する。梁間のみの検出で東西方向に桁行があると考えられる。梁間は2.7mを測る。出土遺物はＰ105より土師器坏片、P106より古墳後期の内面黒色坏が出土している。本址の所産時期は不確実であるが古代と考えられる。

第３節　竪穴状遺構

（１）Ｔａ１号竪穴状遺構（第10図　写真図版三）

本址は、お－４・５、か－４・５Grに位置する。重複遺構の内、本址が一番新しい。形状は遺構確認面で２カ所に床状の硬質面と地床炉のような火所、不規則な配列のピット11個が検出された。

また、本遺構の表土除去時に巻頭８の連弁文青磁碗片や45の羽釜が出土した。これらの事より掘り込みの少ない竪穴状遺構と判断した。

（２）Ｔａ２号竪穴状遺構（第10図　写真図版三）

本址は、い－３Grに位置する。重複遺構の内、本址が一番新しい。形態は方形で南側に一段下がった土坑状の掘り込みがある。規模は検出北壁1.15m、西壁2.10mで、底面面積は2.3㎡である。
本址からの出土遺物は古墳後期の土師器甕・坏や須恵器甕片であるが、遺構の新旧関係より中世と考えられる。

（３）Ｔａ３号竪穴状遺構（第10図　写真図版三）

本址は、お－７・８Grに位置する。重複遺構の内、本址が一番新しい。形状は遺構確認面で床面状の硬質面があり、それを取り囲むように柱穴と考えられるピット群が方形に検出された。規模は北側ラインがＰ６～Ｐ87で1.95m、西側ラインがＰ７～Ｐ18で3.73mである。検出部分の面積は12.9㎡を測る。ピットは36個が検出された。本址からの出土遺物は非常に少なく、古墳後期の土師器坏・甕片とカワラケ片２点が出土した。カワラケは口縁部がやや内わんするタイプと考えられるが小片のため詳細は不明である。本址の所産時期は中世と考えられる。

（４）Ｔａ４号竪穴状遺構（第10図　写真図版三）

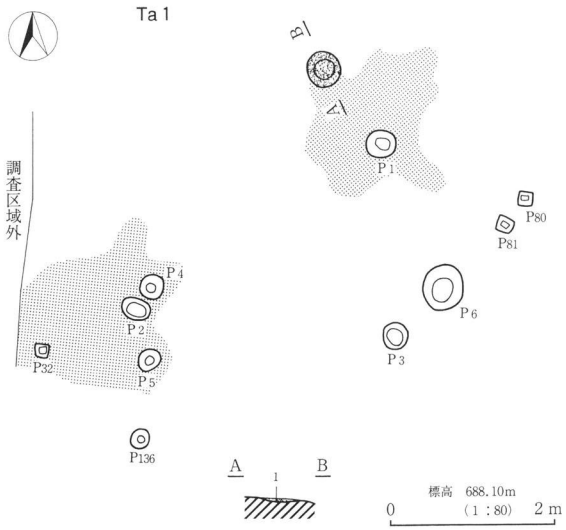
本址は、お－２Grに位置する。重複遺構の内、本址が一番新しい。形態は方形で、規模は北壁1.96m、東壁1.60m、底面面積は2.56㎡を測る。主軸方位Ｎ－24°－Ｗで、ピットが１個検出された。本址からはカワラケ片１点が出土したが小片で詳細不明である。本址の所産時期は中世と考えられる。

（５）Ｔａ５号竪穴状遺構（第11図　写真図版三）

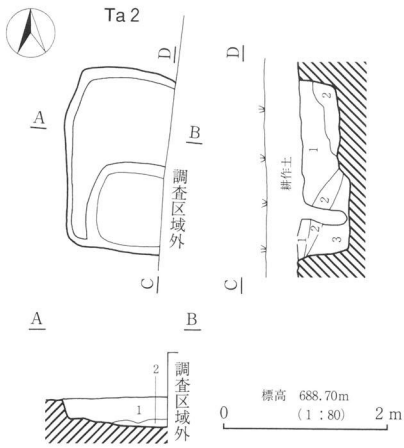
本址は、い・う－３Grに位置する。重複遺構の内、Ｔａ２とＤ４以外は本址が一番新しい。形状は方形と考えられ、南西コーナー部に焼土を伴う円形の土坑が検出された。規模は検出南壁2.15m、西壁3.76m、検出部分面積8.8㎡を測る。床面は部分的に硬質面が確認され、ピットは４カ所検出された。本址からの出土遺物は床面より図示したカワラケが１点出土した。約2/3程残存している。本址の所産時期は中世と考えられる。

（６）Ｔａ６号竪穴状遺構（第11図　写真図版三）

本址は、お－３・４Grに位置する。重複遺構の内、D11・17・18以外は本址が一番新しい。形状はやや歪な長方形と考えられ、規模は検出北壁3.22m、西壁2.92m、検出部分面積10.7㎡を測る。床面は中央が軟質であったが、壁面は緩やかな立ち上がりで壁面部分も硬質な部分が多く確認された。ピットは壁よりを中心に13個が検出された。本址からの出土遺物は少なく、P3内より図示した31～36の編物石がまとまって出土した。本址の所産時期は不確実部分もあるが遺構の形態より中世と考えられる。



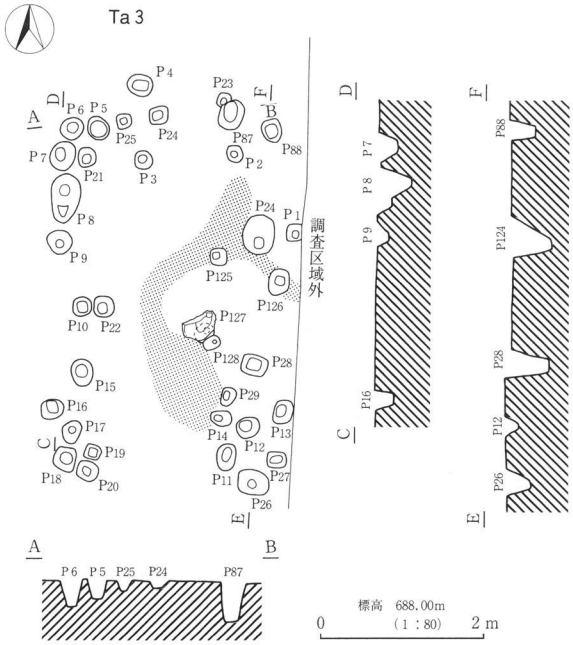
1層　赤色土（10YR 4/6）
しまり、粘性弱く、さらさらしている。よく焼けた焼土層。
下層の地山はあまり焼けていない。

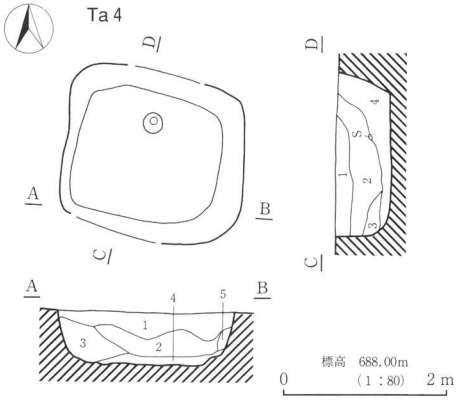


1層　褐灰色土（10YR 4/1）　しまり、粘性弱い。小石を含む。

2層　黒褐色土（10YR 3/1）　しまり、粘性ややあり。1層より黄色の砂を多く含む。

3層　褐 色 土（10YR 4/6）　しまり、粘性弱い。黄色の砂を多く含む。





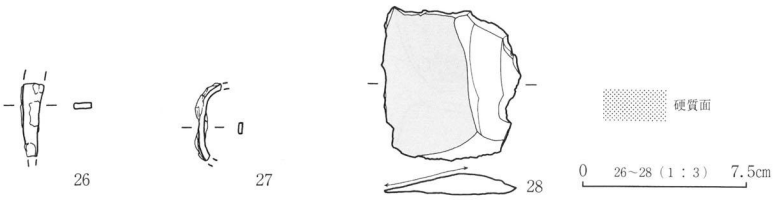
1層　暗褐色土（10YR 3/3）
しまり、粘性弱い。黄色の砂を多く含む。

2層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまり、粘性弱い。

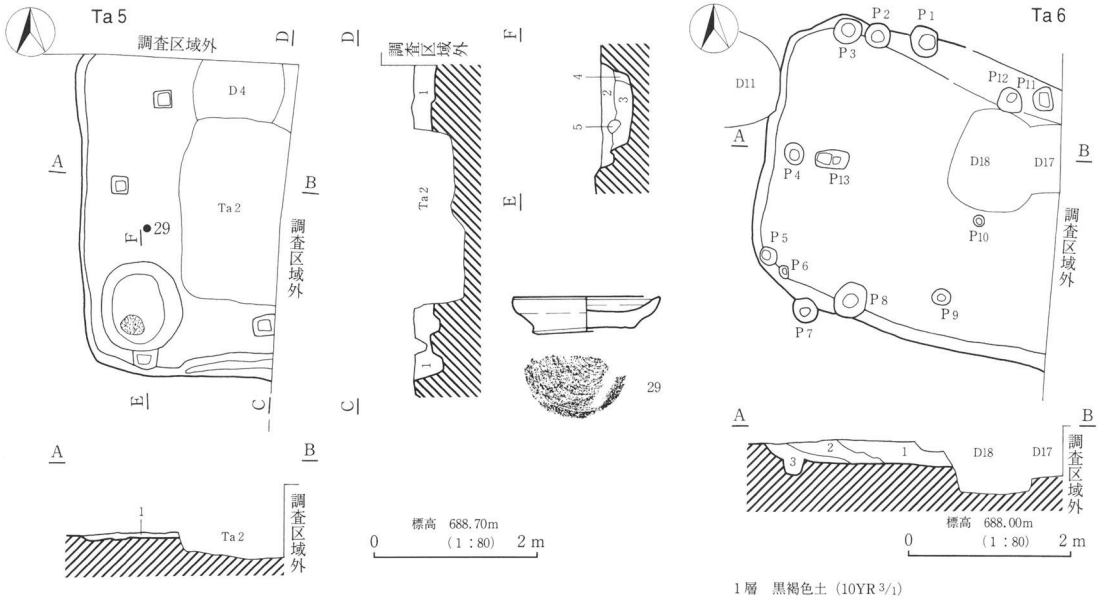
3層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまり、粘性弱い。2層より黄色の砂を多く含む。

4層　褐色土（10YR 4/4）
しまり、粘性弱い。黒褐色土と黄色土の混合土。

5層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまり、粘性ややあり。



第10図　Ｔａ１・２・３・４号竪穴状遺構実測図



1層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまり、粘性弱い。小石を多く含む。

2層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまり、粘性弱い。ぼそぼそしており炭化物を含む。

3層　黒色土（10YR 2/1）
しまり弱く、粘性ややあり。黄色の砂を含む。

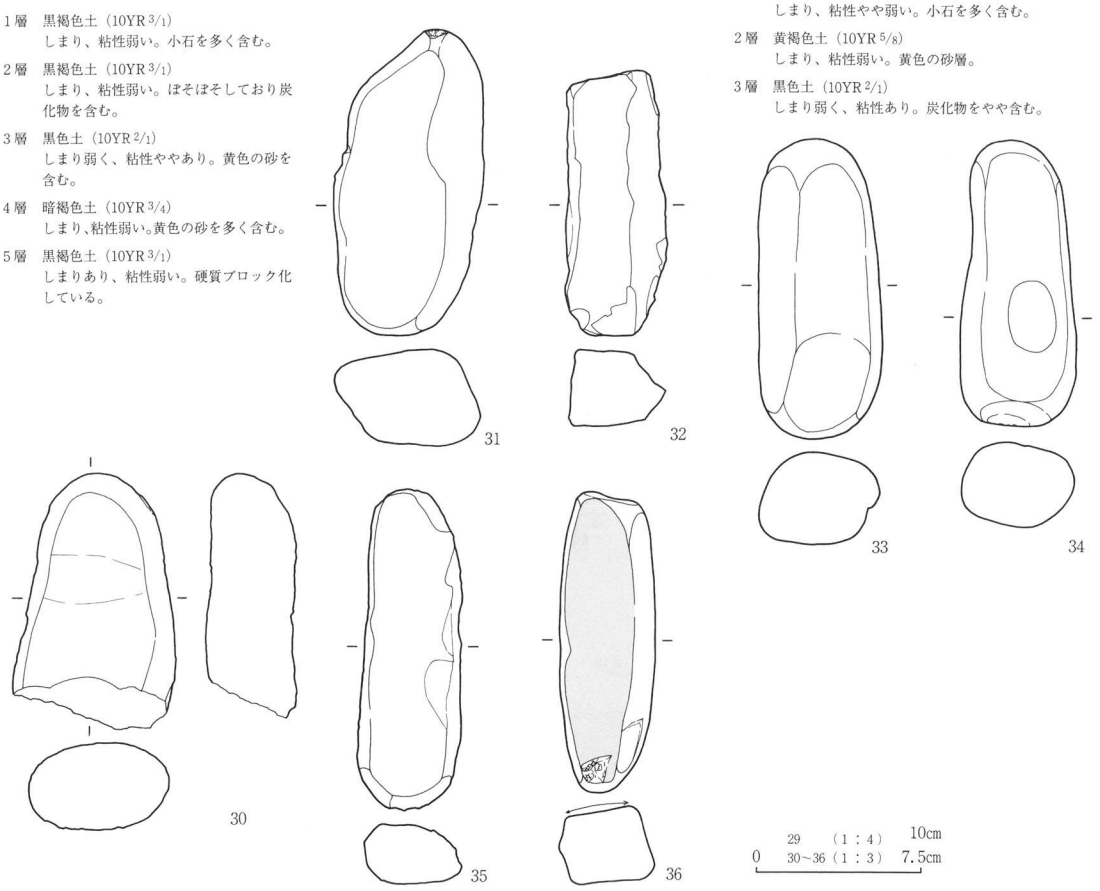
4層　暗褐色土（10YR 3/4）
しまり、粘性弱い。黄色の砂を多く含む。

5層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまりあり、粘性弱い。硬質ブロック化している。

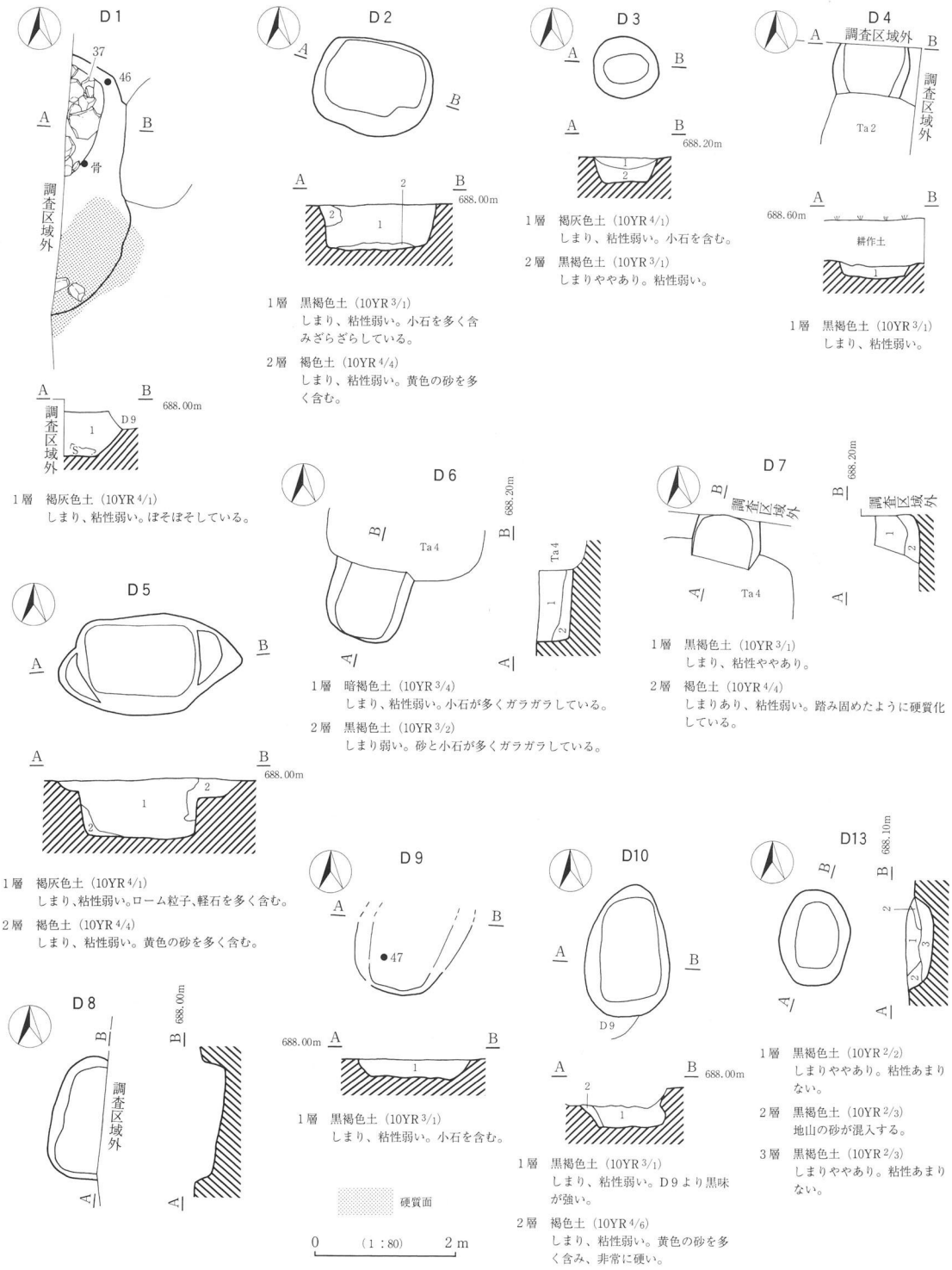
1層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまり、粘性やや弱い。小石を多く含む。

2層　黄褐色土（10YR 5/8）
しまり、粘性弱い。黄色の砂層。

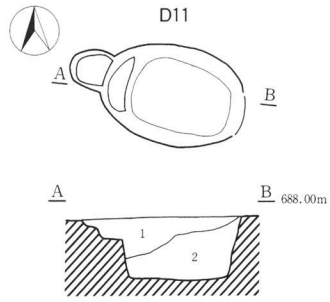
3層　黒色土（10YR 2/1）
しまり弱く、粘性あり。炭化物をやや含む。



第11図　Ｔａ５・６号竪穴状遺構実測図

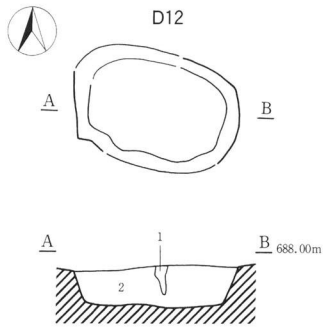


第12図　D 1 ～10・13号土坑実測図



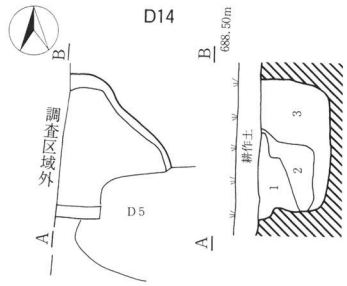
1層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまり、粘性弱い。小石を多く含む。

2層　黄褐色土（10YR 5/8）
しまり、粘性弱い。黒褐色土と黄色土の混合土。互層状になっている。



1層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまりややあり。木の根の撹乱。

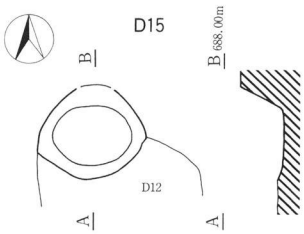
2層　暗褐色土（10YR 3/3）
しまりややあり。粘性弱い。黄色粒子を多く含む。

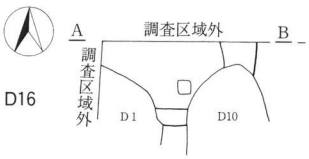


1層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまり、粘性あり。黒色土と小石を多く含む。

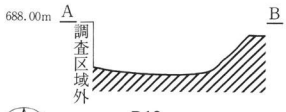
2層　暗褐色土（10YR 3/3）
しまり、粘性弱い。黄色の砂層と黒色土の混合土で、3層より黒色土が多い。

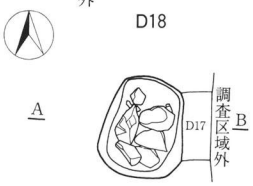
3層　黄褐色土（10YR 5/6）
しまり、粘性弱い。黄色の砂層と黒色土の混合土。



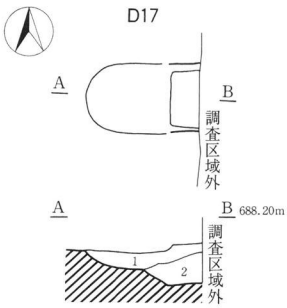


D16



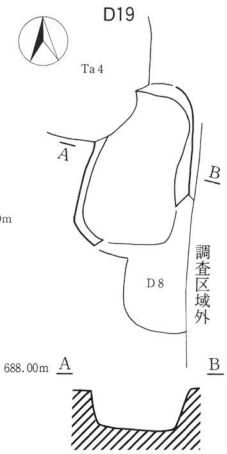


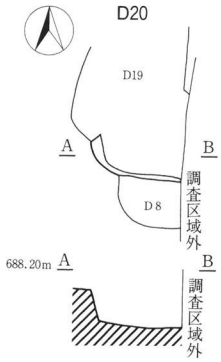
1層　黒褐色土（10YR 3/2）
しまりややあり、粘性弱い。黄色の砂を多量含む。

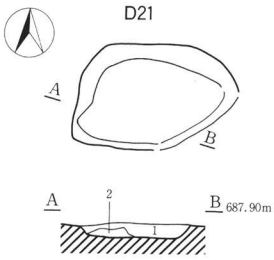


1層　褐灰色土（10YR 4/1）
しまり弱く、ほそぼそしている。

2層　暗褐色土（10YR 3/4）
しまりややあり。粘性弱い。黄色の砂を多く含む。

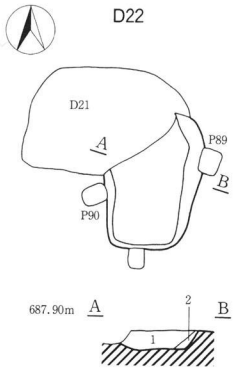






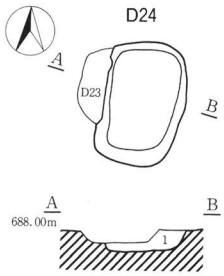
1層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまり、粘性弱い。黄色の砂を多く含む。

2層　褐色土（10YR 4/4）
しまり、粘性弱い。黄色土と黒色土の混合土。



1層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまり、粘性弱い。

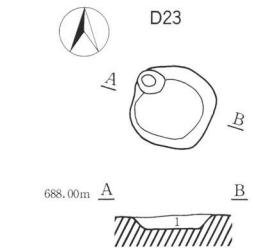
2層　黄褐色土（10YR 5/6）
しまり、粘性弱い。地山の崩れ。



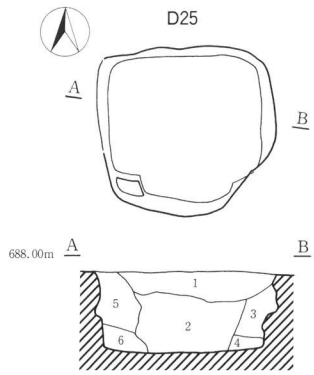
1層　黒褐色土（10YR 3/2）
しまり、粘性弱い。黄色のロームブロックを混入。

0　（1：80）　2 m

第13図　D11・12・14～22・24号土坑実測図



1層　褐灰色土（10YR 4/1）
しまり、粘性弱い。さらさらしている。



1層　にぶい黄褐色土（10YR 4/3）
しまり、粘性弱い。黄色の砂を多く含む。

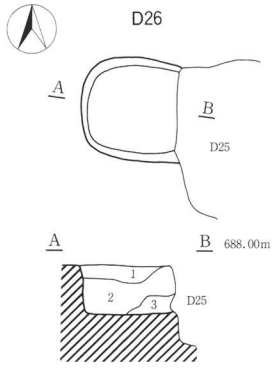
2層　黒褐色土（10YR 3/2）
しまり、粘性弱い。小石を多く含む。

3層　にぶい黄橙色土（10YR 6/4）
しまり、粘性弱い。黄色の砂層。

4層　にぶい黄橙色土（10YR 6/4）
しまり、粘性弱い。黄色の砂層と黒色土の互層。炭化物を含む。

5層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまり、粘性ややあり。小石を多く含む。

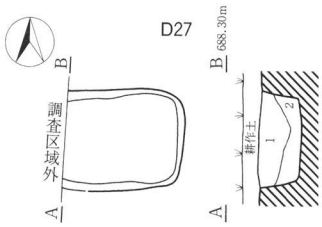
6層　褐色土（10YR 4/6）
しまり、粘性弱い。黄色の砂と黒色土の互層。



1層　灰黄褐色土（10YR 4/2）
しまり、粘性弱い。黄色の砂を多く含む。

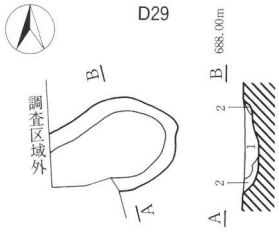
2層　褐灰色土（10YR 4/1）
しまり、粘性弱い。小石を多く含む。

3層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまりあり。粘性弱い。



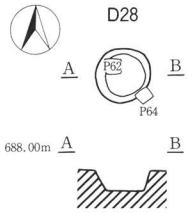
1層　褐灰色土（10YR 4/1）
しまり、粘性弱い。小石を含み、ぼそぼそしている。

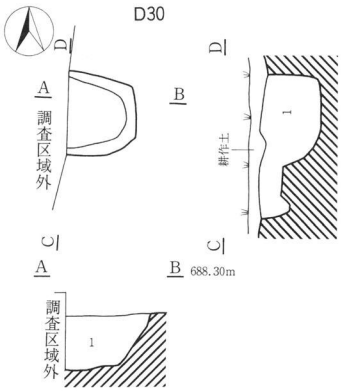
2層　褐灰色土（10YR 6/1）
しまり、粘性弱い。



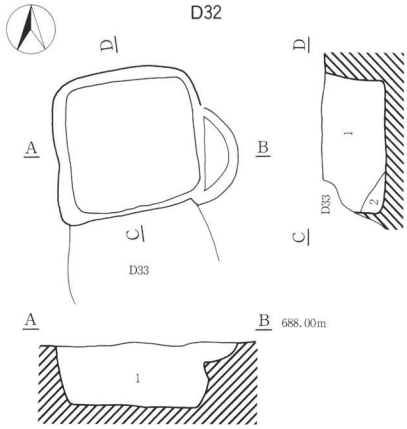
1層　黒色土（10YR 2/1）
しまりややあり。粘性弱い。白色粒子を多く含む。

2層　褐色土（10YR 4/6）
しまりあり。粘性弱い。黄色ロームを多く含む。





1層　褐灰色土（10YR 4/1）
しまり、粘性弱い。小石を含み、ぼそぼそしている。

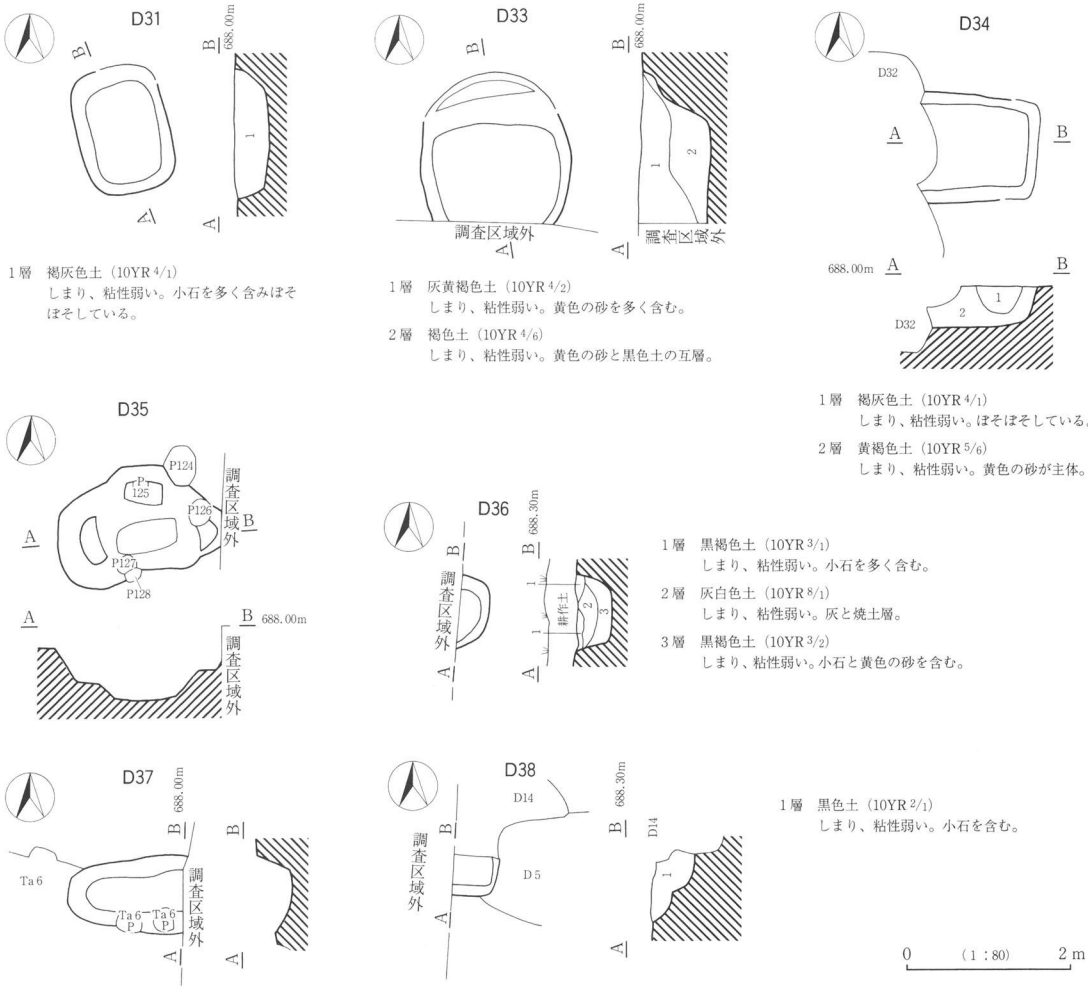


1層　褐灰色土（10YR 4/1）
しまり、粘性弱い。ぼそぼそしている。

2層　黒褐色土（10YR 3/1）
しまりややあり、粘性弱い。1層より硬い。

0　（1：80）　2 m

第14図　D23・25～30・32号土坑実測図



第15図　D31・33～38号土坑実測図

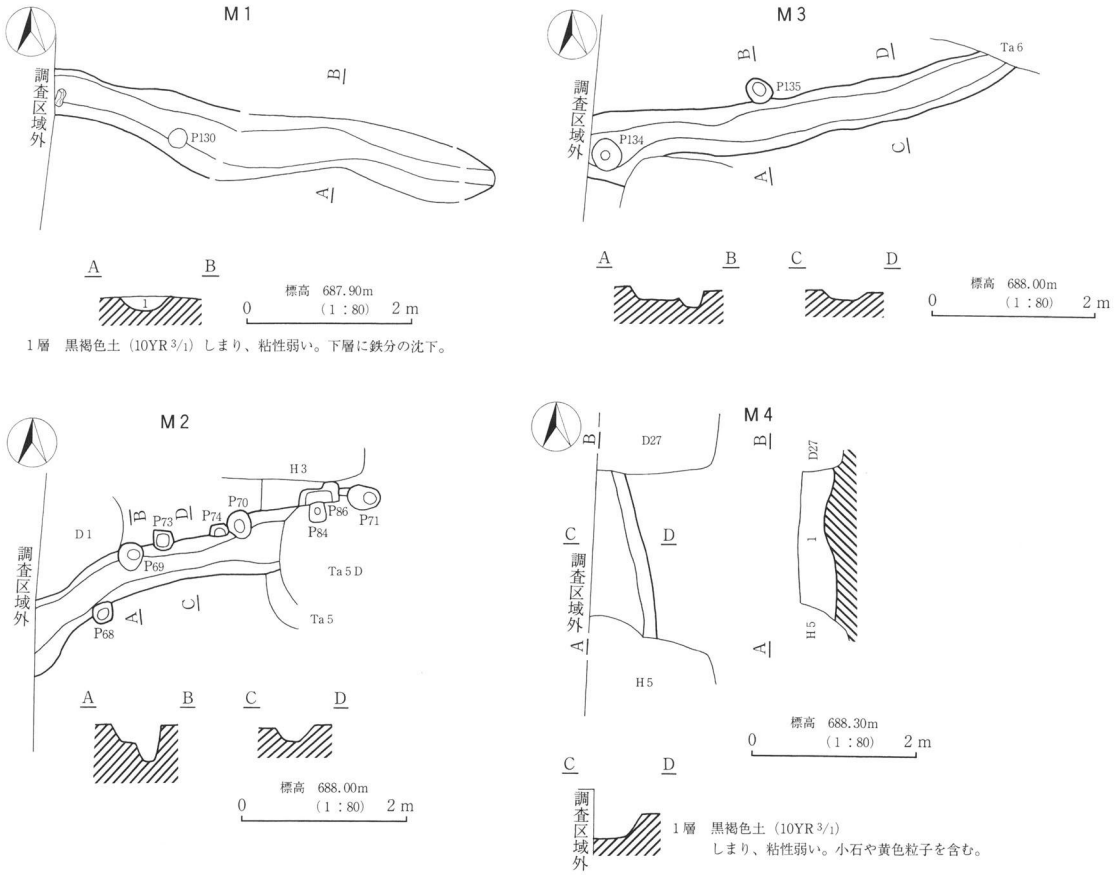
第４節　土　坑（第12～15、17図　写真図版三～六）

本遺跡からは土坑が38基検出された。その内出土遺物や覆土の状態から古代の所産時期が推定されるものとしてD29・35・37の３基がある。この他の35基は中世の所産時期が推定された。本項ではこれら中世所産と考えられる土坑についてその特徴をまとめてみたい。

まず、形態は方形、長方形、円形、不整形があるが、本遺跡としては東西に長軸をもつ長方形の土坑が多い。また、これらの土坑は遺跡内でも深いものが多い傾向にある。覆土は単層のものも多い。ただこの単層は自然堆積というよりも短時間に埋め戻したような土層も観察できる。この事が、D32・33・34号土坑の様に近似する所産時期でありながら、遺構の新旧関係がはっきりと認識できることの理由ではないだろうか。

次ぎに先にも触れたが土坑の深さであるがD５号土坑やD11号土坑に代表されるように、今回深い土坑については「ステップ」とも言える踏み台部分が検出された。これらは土坑内に常時降りる目的の為の施設と考えるとこれら深い土坑の使用目的を示唆するものとも考えられる。

以上のように、中世所産と考えられる土坑は他の遺跡でも数が多く、また形態や出土遺物もバラエティーに富む。土坑本来の使用目的を復元推定すめためには、改めて言うまでもなく慎重な発掘調査による観察が必要である。



第16図　Ｍ１～４号溝状遺構

第５節　溝状遺構

（１）Ｍ１号溝状遺構（第16図　写真図版七）

本址は、お・か－５Grに位置する。重複遺構の内、Ｔａ１以外は本址が一番新しい。形状はＵ字形の掘り込みで東西方向に検出された。東端は自然に立ち上がり消えていた。規模は検出長5.57m、幅48～88cm、深さは20cmを測る。本址よりの出土遺物は古墳後期の内面黒色坏片・甕と武蔵甕片が少量あったのみである。因って所産時期は不明である。

（２）Ｍ２号溝状遺構（第16図　写真図版七）

本址は、う－３・４Grに位置する。重複遺構の内、本址が一番古い。形状はＵ字形の掘り込みで東西方向に検出された。また溝脇にはピットが８個検出された。規模は検出長3.30m、幅47～78cm、深さは24cmを測る。本址よりの出土遺物は古墳後期の内面黒色坏片・甕と須恵器甕片、武蔵甕片が少量あったのみである。因って所産時期は古代と考えられるが不確実である。

（３）Ｍ３号溝状遺構（第16図　写真図版七）

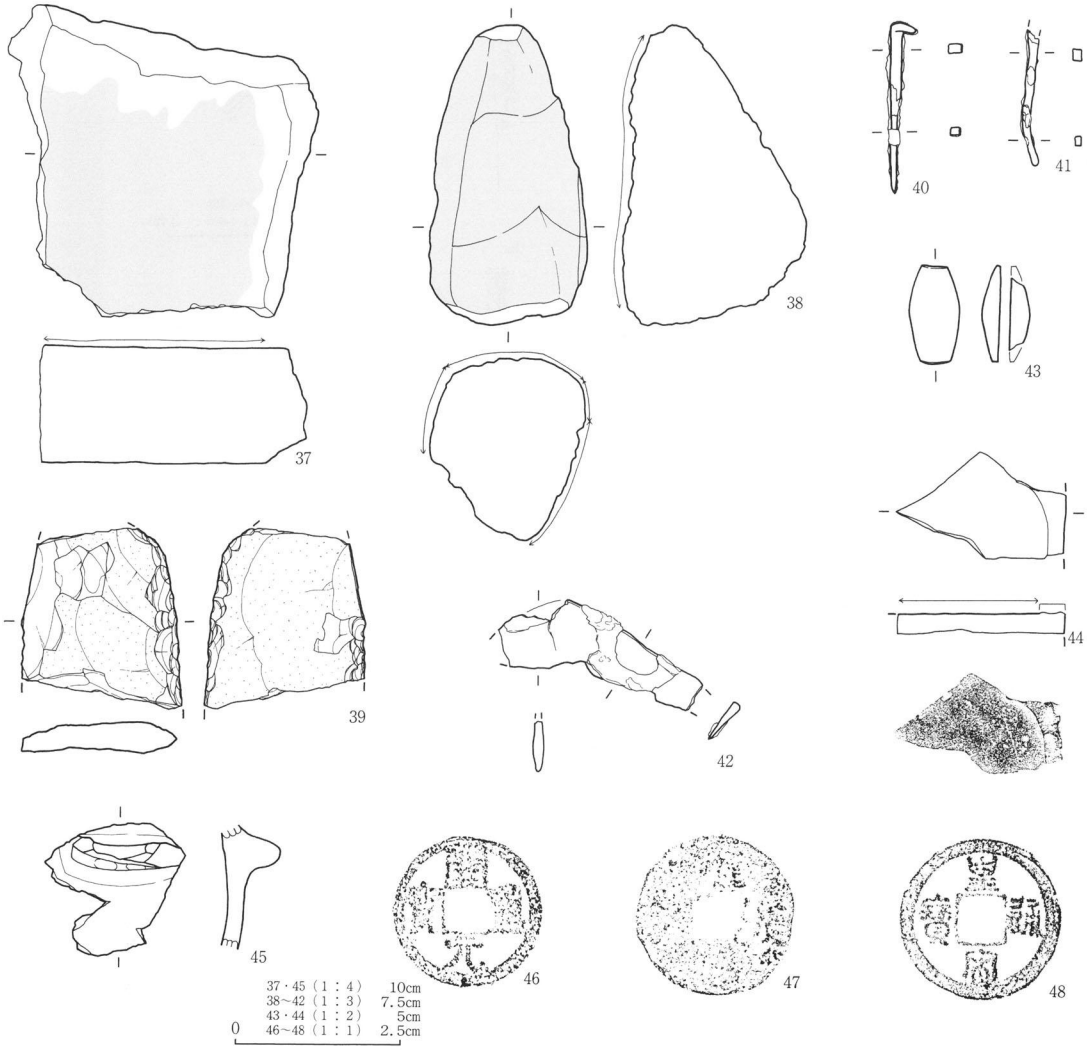
本址は、お・か－４Grに位置する。重複遺構の内、本址が一番古い。形状はＵ字形の掘り込みで東西方向に検出された。規模は検出長5.10m、幅43～63cm、深さは40cmを測る。本址よりの出土遺物は土師器甕片、須恵器坏・甕片が少量あったのみである。因って所産時期は古代と考えられるが不確実である。検出位置よりＭ２号溝状遺構につながる可能性がある。

（4）Ｍ４号溝状遺構（第16図　写真図版七）

本址は、か－８・９Grに位置する。重複遺構の内、本址が一番古い。形状はＵ字形の掘り込みで南北方向に検出された。規模は検出長2.06m、深さは37cmを測る。本址よりの出土遺物は古墳中期高坏片等が少量あったのみである。因って所産時期は古代と考えられるが不確実である。

第６節　ピット

本遺跡からは145個のピットが検出された。これらピットはその覆土の状態と出土遺物で古代と中世のそれぞれ二時期に所産が分かれると判断した（表中で古代と記載したもの以外は中世と判断）。ピットの検出位置は大きく遺跡の北側と南側に分かれ中央部分は少ない傾向にあった。特に中世のピットはこの傾向が顕著で、南側のＴａ３付近は不規則な配列であるが東西方向に長い建物址の存在を推定できる。ピットの形態は古代と考えられるものは円形でやや大きく黒色土が覆土であり、中世のものは方形が基調で、覆土は褐灰色土のものが多かった。出土遺物としてはＰ８よりカワラケ片が、Ｐ124からはＳ字甕の小片が出土している。



第17図　土坑及び遺構外出土遺物実測図

土坑計測表

番号	形態	検出位置	長軸	短軸	深さ	長軸方位	出土遺物	番号	形態	検出位置	長軸	短軸	深さ	長軸方位	出土遺物
1	不明	う-3	367	〈83〉	20.5～59		カワラケ	20	不明	い.お-2			19～40.5		
2	長方形	か-4	170	136	55～63	N-76°-W		21	不整形	か-6.7	198	130	13～22.5	N-88°-E	
3	円形	お-4	92	87	29～36.5	N-87°-E		22	長方形	お.か-7	(170)	115	12.5～22.5	N-5°-E	
4	不明	い-3	110	〈70〉	9～20			23	円形	お.か-6	100	99	6～18.5	N-73°-W	
5	長方形	か-3.4	260	144	67～77	N-88°-E		24	長方形	お.か-6	152	100	9.5～38.5	N-10°-E	
6	長方形	お-2	〈101〉	113	39～47	N-18°-E		25	方形	お-8.9	(215)	205	36.5～93	N-89°-E	カワラケ
7	不明	お-1	97	〈67〉	61～65	N-76°-W		26	方形	か-8	127	〈116〉	48.5～58	N-2°-E	
8	長方形?	え.お-2	172	〈71〉	22.5～33.5	N-10°-E		27	長方形	か-8	〈145〉	125	14～43.5	N-90°-E	カワラケ
9	不明	う-3	〈125〉	150	18～29	N-18°-E	カワラケ	28	円形	い-4	70	66	22～25	N-51°-E	
10	長方形	う-3	187	117	20～59	N-2°-E		29	不明	う-4	〈165〉	115	8～20	N-70°-E	
11	長方形	お.か-3	(223)	116	66.5～76.5	N-74°-W		30	不明	か-9	98	〈85〉	23～28		
12	長方形	お.か-2	210	(143)	34～46	N-73°-W		31	方形	か-9.10	158	112	23.5～40.5	N-15°-W	
13	長方形	お-2.3	137	100	24～34	N-2°-E		32	方形	お.か.-9.10	(224)	177	20～74.5	N-82°-E	打製石斧
14	不整形	か-3.4	175	〈134〉	50～69.5			33	方形?	お.か-10	〈185〉	185	61～79.5	N-4°-W	
15	円形	か-1.2	129	(115)	6～52	N-88°-E		34	長方形	お-9.10	〈150〉	130	6～47.5	N-89°-W	
16	不明	う-3	〈190〉	〈102〉	9～44			35	不整形	お-7.8	〈202〉	127	53～62	N-81°-E	
17	不明	え.お-3	(141)	83	13.5～18	N-90°-E	砥石?	36	不明	か-6	90	〈36〉	28.5～33		
18	方形	お-3	125	98	26～35	N-14°-E		37	不整形	い.お-3	〈140〉	87	12～41.5	N-90°-W	
19	長方形	い.お.-2	(220)	124	20～46	N-14°-E		38	不明	か-4			25～29		

ピット計測表

番号	検出位置	径	深さ	出土遺物	備考	番号	検出位置	径	深さ	出土遺物	備考	番号	検出位置	径	深さ	出土遺物	備考
1	お-7	20	35		Ｔａ3	50	か-2	29	6			97	か-7	31	39.5	土師器高坏	
2	お-7	21	20		Ｔａ3	51	お-2	22	10.5	武蔵甕片		98	か-8	27	22		
3	お-7	24	16.5		Ｔａ3	52	お-2	24	11			99	か-8	25	20.5		
4	お-7	33	14		Ｔａ3	53	お-2	19	7			100	か-8	22	26		
5	お-7	29	23.5	須恵器甕	Ｔａ3	54	お-2.3	28	18			101	お-8	33	15.5		
6	お-7	28	33.5		Ｔａ3	55	お-3	29	18			102	お-8	30	45		
7	お-7	35	22		Ｔａ3	56	か-3	26	24			103	お-8	80	46	土師器甕	古代
8	お-7	60	41	カワラケ	Ｔａ3	57	か-3	41	18			104	お-8	55	48	武蔵甕	古代
9	お-7	32	14		Ｔａ3	58	か-2	55	13			105	お-8	53	40.5	土師器坏	古代
10	お-7	22	13.5		Ｔａ3	59	お-3	69	46.5			106	お-9	108	43	内黒坏	古代
11	お-8	33	18		Ｔａ3	60	い-3	26	11			107	か-8	24	36		
12	お-8	28	16		Ｔａ3	61	い-4	17	26			108	お-9	22	9.5		
13	お-8	28	16.5		Ｔａ3	62	い-4	21	13			109	お-9	24	20	内黒坏	
14	お-8	26	13		Ｔａ3	63	い-3	30	18			110	お-9	50	22.5	内黒坏	
15	お-8	33	22.5		Ｔａ3	64	い-4	20	19			111	お.か-9	39	14.5		
16	お-8	28	24.5		Ｔａ3	65	い-4	15	16			112	か-9	61	11.5	弥生壺	
17	お-8	25	22		Ｔａ3	66	う-4	25	18			113	か-6	67	33.5	須恵器坏・甕	古代
18	お-8	28	36		Ｔａ3	67	う-4	26	25			114	お-9	28	12.5		
19	お-8	20	15.5		Ｔａ3	68	う-3	26	42		古代	115	お-9	32	33.5		
20	お-8	27	28.5		Ｔａ3	69	う-3	32	43		古代	116	お-9	31	26	内黒坏	
21	お-7	25	18.5		Ｔａ3	70	う-3	31	29		古代	117	お-9	46	14		
22	お-7	25	31		Ｔａ3	71	う-3	39	44		古代	118	か-9	29	11.5		
23	お-7	18	11.5		Ｔａ3	72	う-3	17	17.5			119	か-9	29	32		
24	お-7	23	6.5		Ｔａ3	73	う-3	25	29		古代	120	か-10	30	30	土師器甕	
25	お-7	18	14		Ｔａ3	74	う-3	22	17		古代	121	か-8	44	23		
26	お-8	37	29		Ｔａ3	75	お-5.6	55	36	土師器坏	古代	122	お-6	31	24		
27	お-8	24	17.5		Ｔａ3	76	お-6	68	21		古代	123	か-6	26	29.5		
28	お-8	33	21.5		Ｔａ3	77	か-5	42	44	カワラケ		124	お-7	49	52	Ｓ字甕	Ｔａ3
29	お-1	66	29	須恵器・土師器		78	か-6	61	25	内黒坏	古代	125	お-7	20	22		Ｔａ3
30	お-1.2	100	41			79	か-5.6	73	40	土師器高坏	古代	126	お-7	33	29		Ｔａ3
31	お-2	27	18			80	お-4.5	19	20.5			127	お-7	25	28		Ｔａ3
32	お-2	53	23			81	お-5	20	15.5			128	お-7.8	21	41.5		Ｔａ3
33	お-2	42	22			82	か-6	67	16	土師器高坏	古代	129	お-8	23	19		Ｔａ3
34	お-2	57	18.5			83	お-7	78	27.5	武蔵甕	古代	130	か-5	23	18		
35	お-2	29	20			84	う-3	22	23		古代	131	か-5	88	16.5		古代
36	お-2	29	15			85	う-3	47	25		古代	132	か-5	17	9.5		
37	か-1	44	21	武蔵甕片	古代	86	う-3	47	24		古代	133	か-5	47	26.5		古代
38	か-3	39	20		古代	87	お-7	38	51			134	か-4	40	32		古代
39	か-3	70	37		古代	88	お-7	28	27.5			135	か-4	35	22.5		古代
40	か-3	37	13		古代	89	お-7	32	21.5	内黒坏		136	か-3	19	15.5		
41	お-1	28	30			90	か-7	31	9			137	お-2	27	58		
42	か-1	66	28			91	か-7	34	29.5	土師器坏		138	お.か-2	85	18		
43	か-1	28	15			92	か-7	28	19			139	か-2	92	21		
44	か-1	28	10			93	か-7	30	21			140	お-8	107	41		古代
45	か-2	36	17			94	か-7	25	15			141	か-5	56	62		古代
46	か-2	42	12			95	か-7	28	10			142	お-9	62	13.5		古代
47	か-2	30	11			96	か-7	23	10.5			143	お-9	19	13.5		
48	か-2	23	12			95	か-7	28	10			144	お-9	12	16.5		
49	か-2	30	30			96	か-7	23	10.5			145	う-3.4	35	24.5		

住居址計測表

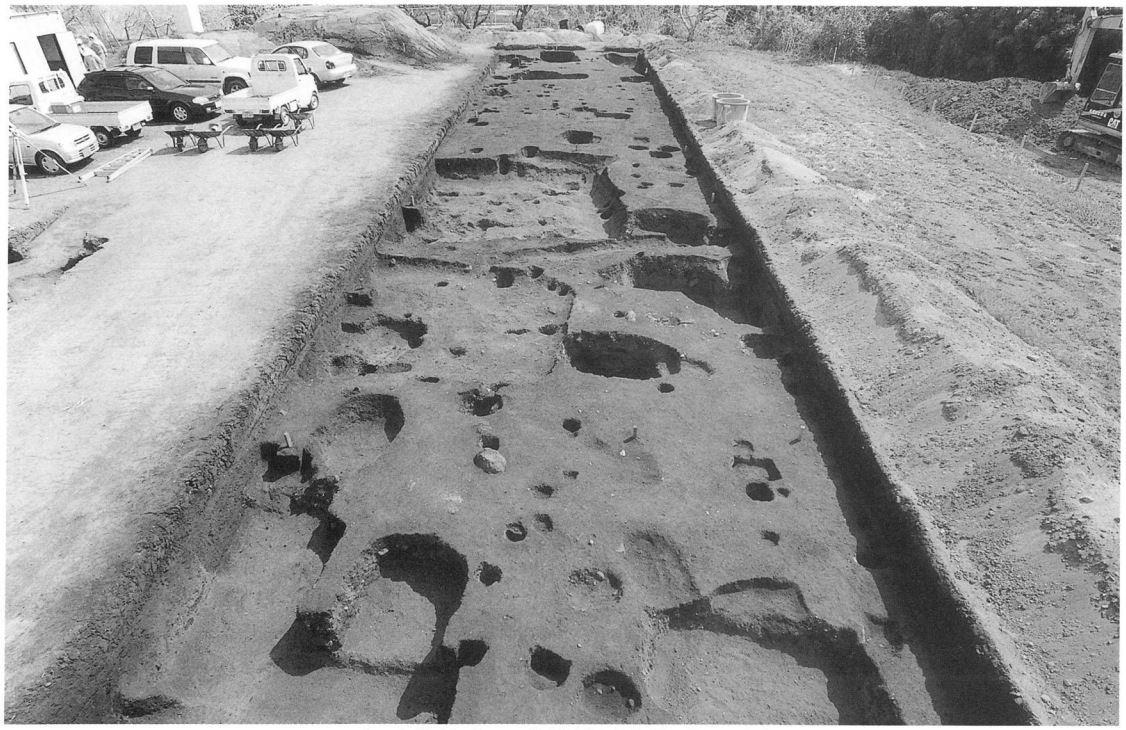
遺構名	グリット	面　積	壁　長（m）				柱穴規模　径×深さ（cm）	備　考
			北　壁	南　壁	西　壁	東　壁		重複遺構
H1	い－4 う－4	〈1.328㎡〉	〈3.22〉	－	－	－		Ta5・D28
H2	お－4・5 か－4・5	〈21.936㎡〉	〈4.78〉	〈4.63〉	5.38	－	P1・81×63.5　P2・83×84.5　P3・75×67 P4・82×73　P5・30×29.5　P6・82×8.5 P7・44×36.5　P8・34×62.5　P9・70×40 P10・55×53.5　P11・37×29　P12・35×18.5 P13・25×37　P14・30×50.5　P15・24×50.5 P16・40×52	Ta1 D2.3 M1.3 P75.141
H3	い－3 う－3	6.240㎡	－	〈3.23〉	－	〈1.95〉		Ta5 D1.10
H4	え－1.2 お－1.2		－	〈0.42〉	〈0.95〉	－		Ta4 D7.19
H5	か－9 き－9.10	〈4.084㎡〉	〈1.57〉	〈1.65〉	－	2.7	P1・53×25	D30.31
H6	お－9.10	〈3.248㎡〉	〈0.97〉	〈1.25〉	3.80	－	P1・60×21.5	D34 F2（P142） P110.115

出土遺物観察表

№	遺構名	器　種	法　量（cm）				成　形・調　整		備　考	出土位置
			口径・長さ	底径・幅	器高・厚さ	重量g	内　面	外　面		
1	H2	須恵器　坏蓋	(14.0)	天井部7.3	<3.4>		ロクロナデ	ロクロナデ	1/2残存	Ⅰ区
2	H2	須恵器　高坏	—	—	<2.9>		ロクロナデ　※釉が付着	ロクロナデ→波状文→つまみ貼付 ※釉が付着		Ⅰ区
3	H2	須恵器　壺	—	—	<1.7>		ロクロナデ	ロクロナデ→横線文→波状文		Ⅰ区掘り方
4	H2	土師器　坏	13.4	10.5	3.6		口縁部　ヨコナデ　見込み部　ミガキ	口縁部　ミガキ　底部　ヘラ削り→ナデ	1/2残存	Ⅰ区 Ta1 Ⅰ区
5	H2	土師器　坏	8.7	丸底	4.2		ヨコナデ 黒色処理→放射状に暗文	口縁部　ヨコナデ 体部～底部　ヘラ削り	底部欠損　口縁～体部1/2残存	Ⅳ区
6	H2	土師器　甕	13.6	—	<6.7>		ナデ	口縁部　ヨコナデ 体部　ヘラ削り　口唇部肥厚	口縁部1/4残存	Ⅰ区掘り方
7	H2	土師器　甕	—	9.5	<3.0>		不明	ヨコナデ	底部のみ残存	カマド袖
8	H2	土師器　甕	—	—	<15.0>		ヘラナデ　※輪積み痕あり	ヘラ削り	胴部3/4残存	カマド床直
9	H2	凹石	10.4	6.8	4.3	169.0	正面と両側面はたいら。正面中央に窪みがある。		軽石	Ⅳ区掘り方
10	H2	磨石	9.1	5.5	4.5	332.0	全体に滑らか。右側面にスリ。		輝石安山岩	Ⅳ区
11	H2	敲石	9.2	4.9	2.4	169.0	左側面にスリと敲き。		輝石安山岩	Ⅳ区
12	H2	敲石	9.0	4.5	2.8	179.0	下部先端に敲き。		安山岩	Ⅳ区
13	H5	須恵器　蓋	11.1	<1.9>	1.9		かえり部貼付→ロクロナデ	ロクロナデ	1/10残存	Ⅰ区
14	H5	須恵器　坏	14.8	7.9	3.9		ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転　ヘラ切り→ヘラナデ ※火だすき痕あり	2/3残存	Ⅰ区床直 Ⅱ区掘り方
15	H5	須恵器　坏	14.4	6.8	4.2		ロクロナデ	ロクロナデ→回転糸切り	口縁部1/4 底部1/2　残存	Ⅱ区
16	H5	須恵器　鉢	23.4	—	<10.6>		ロクロナデ	ロクロナデ	1/4残存	Ⅰ区床直 Ⅱ区掘り方
17	H5	刀子	<10.9>	1.5	0.5					3cm
18	H5	鉄製品	<6.5>	1.0	0.6					上層
19	H6	須恵器　坏蓋	(10.8)	天井部(9.8)	3.7		ロクロナデ	ロクロナデ→天井部　回転糸切り	1/4残存	
20	H6	土師器　坏	12.7	—	<6.3>		口縁部～体部横方向のミガキ→黒色処理	口縁部～体部　ナデ→ミガキ　底部付近　ヘラ削り	口縁～体部1/4残存	一括
21	H6	土師器　甕	22.0	—	<9.4>		口縁部　ヨコナデ　体部　刷毛目の残るナデ	口縁部　ヨコナデ→体部　下から上へヘラ削り	口縁～胴部1/4残存	
22	H6	土師器　甕	—	6.6	<6.1>		ヨコナデ	底部　ヘラ削り	底部のみ残存	2cm
23	H6	磨石	13.9	9.4	4.0	734.0	全体に滑らか。右側面にスリあり。下部先端に敲き。		輝石安山岩	
24	H6	磨石	14.8	5.3	6.2	765.5	両側面にスリ。上下先端に敲き。		輝石安山岩	一括
25	H3	鎌	12.7	2.8	0.3					23cm
26	Ｔａ1	鉄製品	<3.4>	0.9	0.2					
27	Ｔａ3	鉄製品	<3.5>	0.2	0.5					Ⅱ区
28	Ｔａ3	磨石	<7.0>	<6.2>	<1.0>	47.5	剥離片。一面がスリ。やや窪む。		安山岩	Ⅰ区
29	Ｔａ5	カワラケ	8.9	6.0	2.1		ロクロナデ	ロクロナデ→回転糸切り	1/2残存	6.5cm
30	Ｔａ6	磨石？	11.7	7.3	4.0	420.5	正面中央部を横切るように窪みがある。		花崗岩	Ⅰ区
31	Ｔａ6		12.1	4.5	3.5	313.0	全体に滑らか。		黒色緻密安山岩	P3
32	Ｔａ6	編物石	14.0	6.8	4.4	636.0	全体に滑らか。上部先端に敲き。		輝石安山岩	P3
33	Ｔａ6	編物石	13.7	5.6	4.2	540.0	全体に滑らか。		花崗岩	P3
34	Ｔａ6	編物石	13.0	5.4	3.9	484.0	全体に滑らか。正面中央と下部に窪みがある。		輝石安山岩	P3
35	Ｔａ6	編物石	14.7	4.6	2.7	344.0			ホルンヘルス	P3
36	Ｔａ6	編物石	13.8	4.4	3.6	369.0	正面にスリ。		輝石安山岩	P3
37	D1	磨石	<18.0>	<17.5>	7.0	4340.0	正面にスリ。		輝石安山岩	3.5cm
38	D17	砥石？	13.7	7.1	8.3	201.5	四面にスリ。正面中央部がやや窪む。		軽石	
39	D32	打製石斧	<7.8>	<7.0>	1.4	107.0	破片。		輝石安山岩	
40	D17	釘	7.3	0.6	0.4					
41	D19	釘？	<6.2>	0.4	0.5					
42	D31	鎌	<9.4>	2.9	0.5					
43	D1	土錘	3.0	1.5		6.4	ツルツルしている。		両端部欠損	
44	D20	硯		<5.7>	<0.6>		破片。			
45	一括	土師器　羽釜			<7.6>		ヘラナデ	ナデ		
46	D1	古銭		2.2		3.2	「開元通寶」			31cm
47	D9	古銭		2.4		2.15	不明			20cm
48	一括	古銭		2.4		2.2	「皇宋通寶」			

※出土位置の○cmは床面よりの高さ

西一本柳遺跡XII東側調査区全景（北より）



西一本柳遺跡XII西側調査区全景（北より）

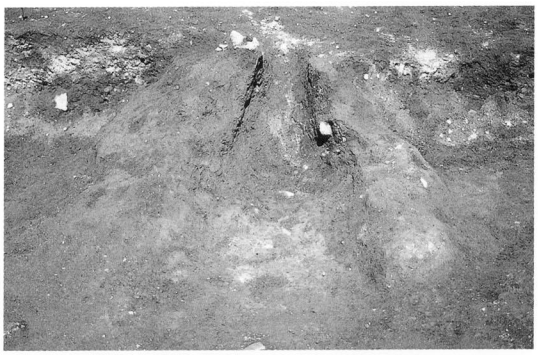
図版二

Ｈ１号住居址全景（西より）

Ｈ１号住居址掘り方（南より）

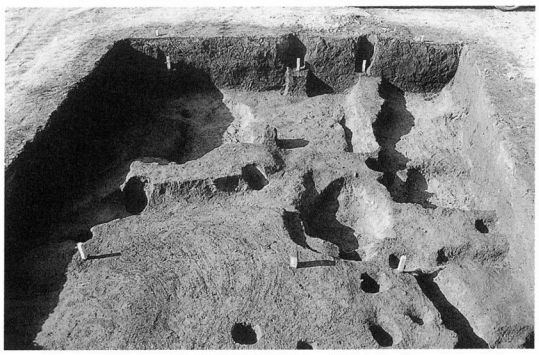
Ｈ２号住居址全景（南より）

Ｈ２号住居址掘り方（南より）



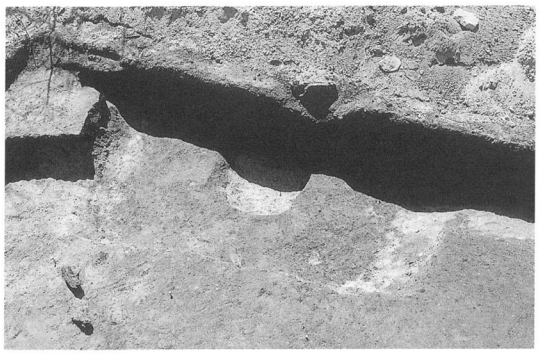
Ｈ２号住居址カマド（南より）

Ｈ２号住居址カマド調査風景（東より）



Ｈ３号住居址全景（南より）

Ｈ４号住居址全景（南より）

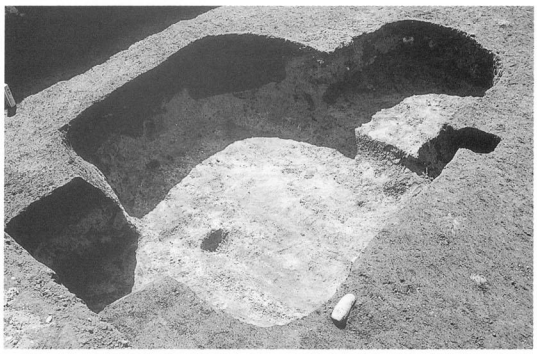

Ｈ５号住居址全景（東より）

Ｈ６号住居址全景（西より）

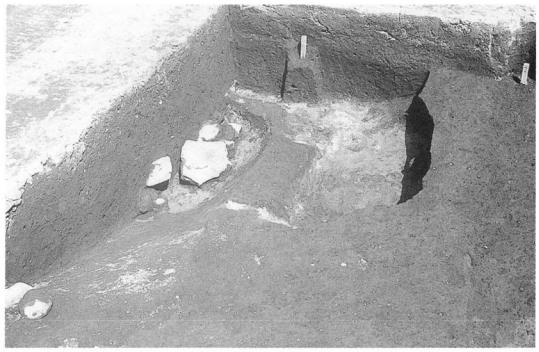
Ｔａ１号竪穴状遺構全景（東より）

Ｔａ２・５号竪穴状遺構全景（北より）

Ｔａ３号竪穴状遺構（西より）

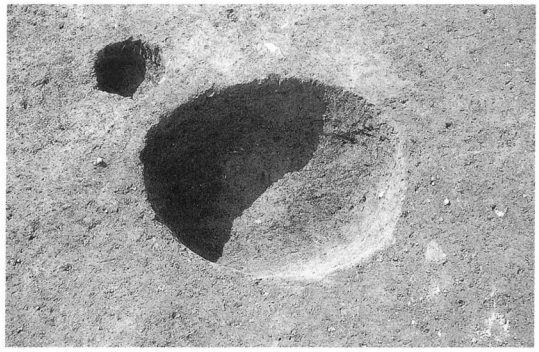

Ｔａ４号竪穴状遺構・Ｄ７号土坑全景（北より）

Ｔａ６号竪穴状遺構全景（東より）

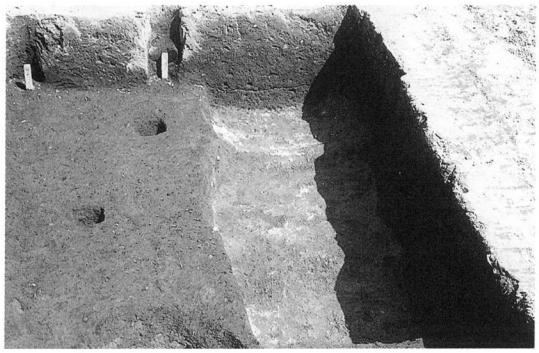

Ｄ１号土坑全景（南より）

図版四

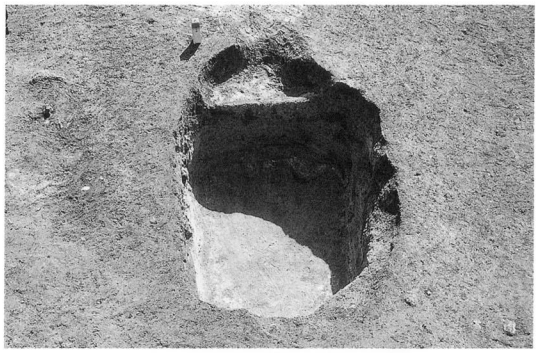
Ｄ２号土坑全景（西より）



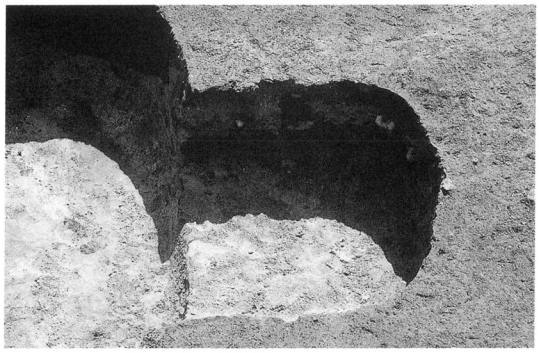
Ｄ３号土坑全景（北より）



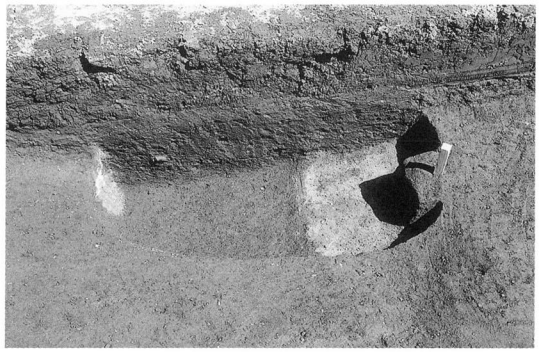
Ｄ４号土坑全景（南より）



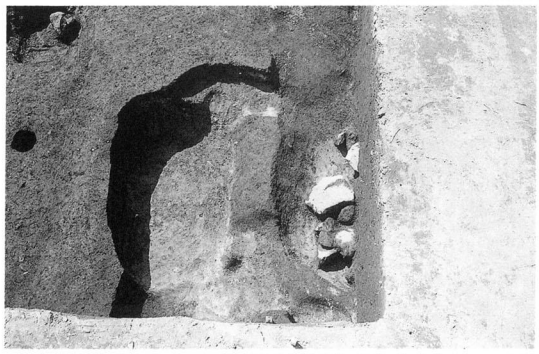
Ｄ５号土坑全景（西より）



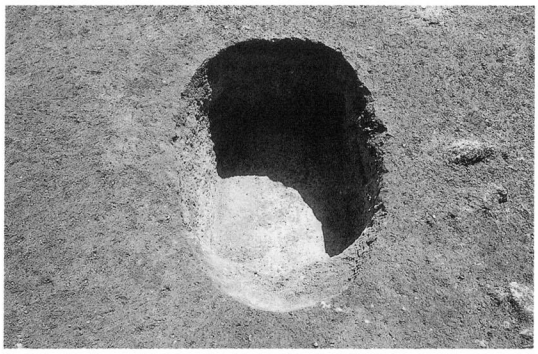
Ｄ６号土坑全景（西より）



Ｄ８号土坑全景（西より）

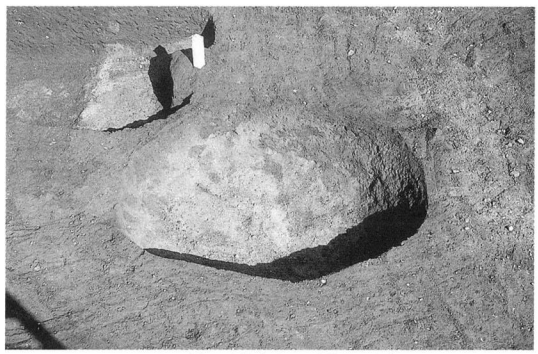


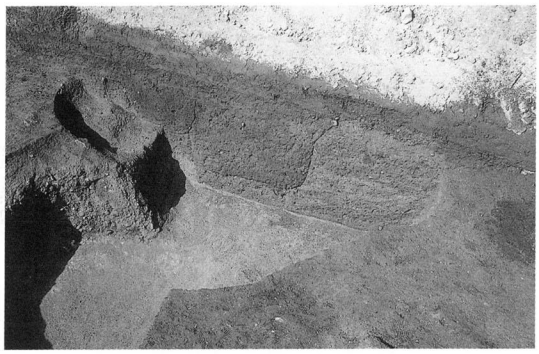
Ｄ９・10・16号土坑全景（北より）



Ｄ11号土坑全景（西より）

D12・15号土坑全景（南より）


D13号土坑全景（南より）


D14号土坑全景（北より）

D18号土坑全景（南より）

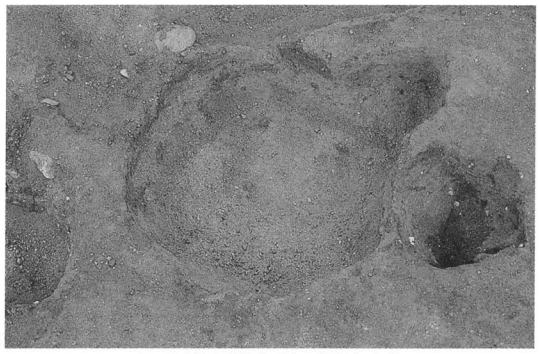
D19・20号土坑全景（北より）

D21・22号土坑全景（北より）

D23・24号土坑全景（南より）

D25・26号土坑全景（北より）

D27号土坑全景（北から）


D28号土坑全景（西から）

D29土坑全景（東より）

D30号土坑全景（東より）

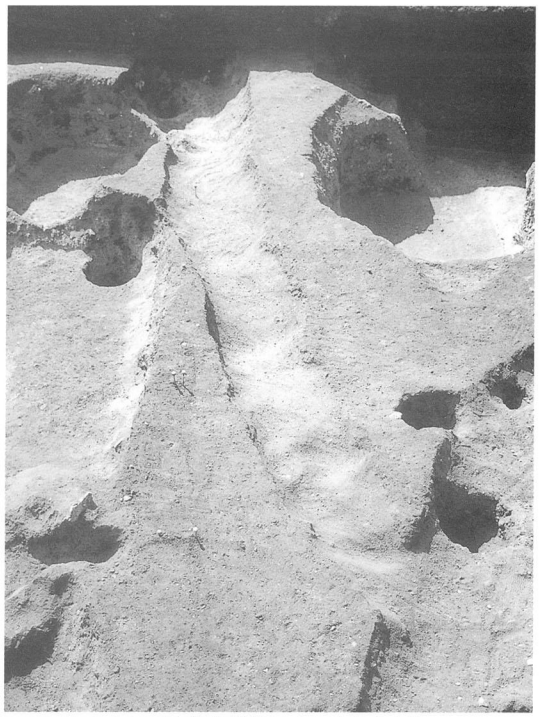
D32号土坑（東より）

D32・33・34号土坑全景（北より）

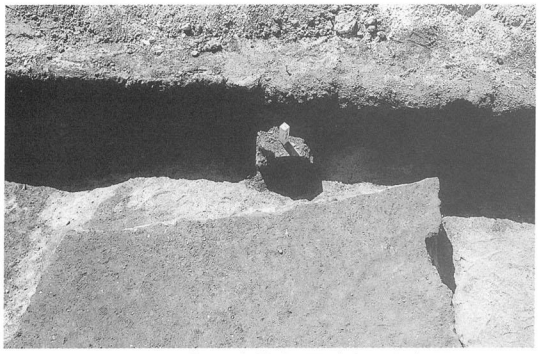
D35号土坑全景（西より）

D36号土坑全景（東より）

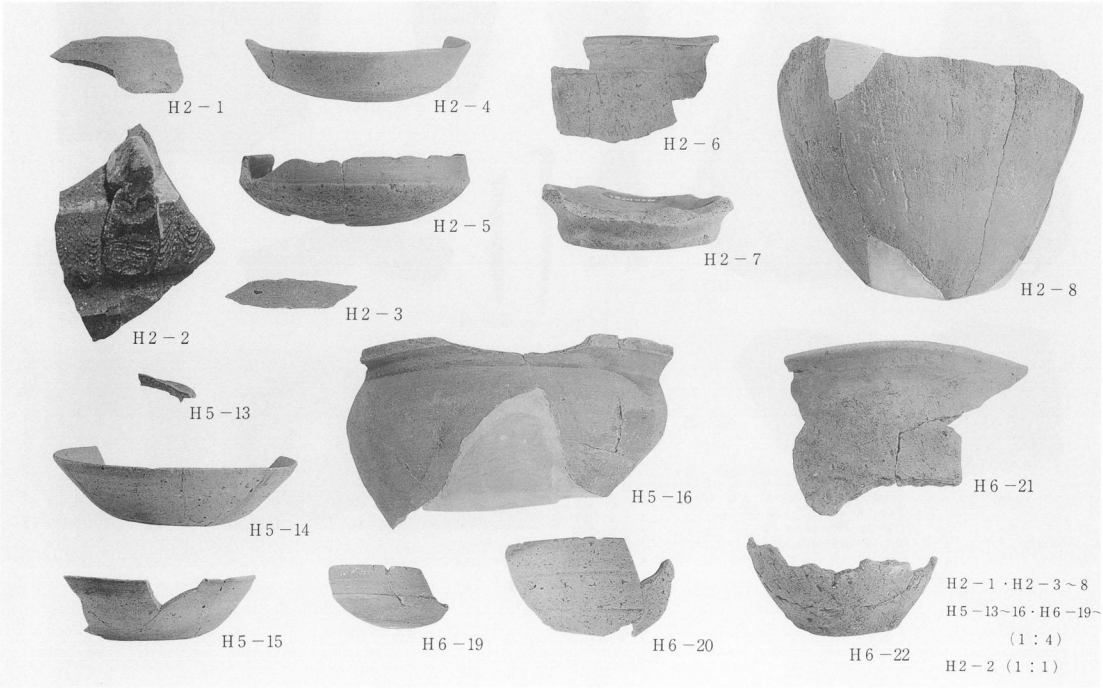
Ｍ１号溝状遺構全景（南より）



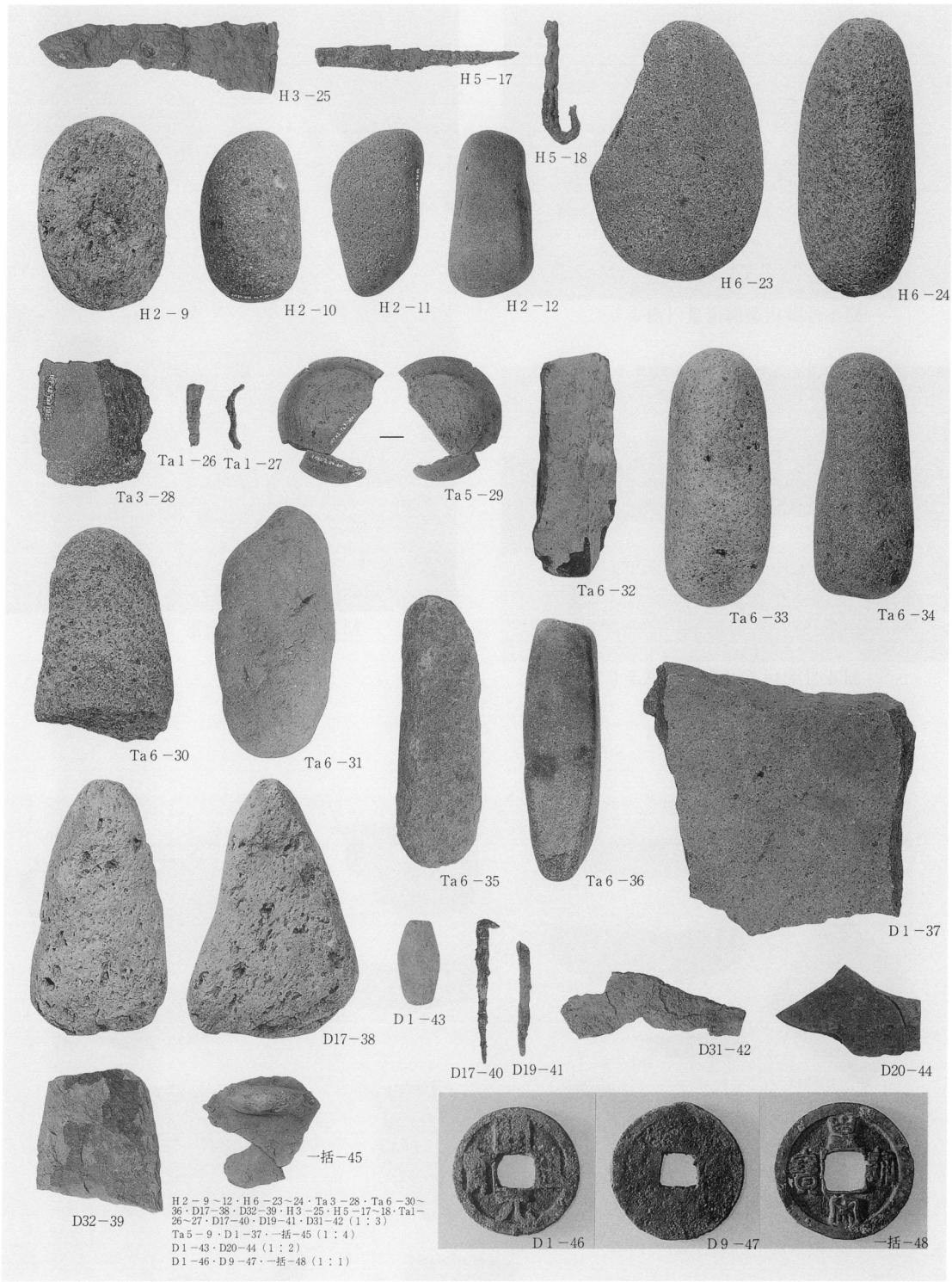
Ｍ３号溝状遺構全景（東より）



Ｍ４号溝状遺構全景（東より）



出土遺物


H 3 －25
H 5 －17
H 5 －18
H 6 －23
H 6 －24
H 2 － 9
H 2 －10
H 2 －11
H 2 －12
Ta 1 －26
Ta 1 －27
Ta 3 －28
Ta 5 －29
Ta 6 －32
Ta 6 －33
Ta 6 －34
Ta 6 －30
Ta 6 －31
Ta 6 －35
Ta 6 －36
D 1 －37
D 1 －43
D17－38
D17－40
D19－41
D31－42
D20－44
D32－39
一括－45
D 1 －46
D 9 －47
一括－48
H 2 － 9 ～12・H 6 －23～24・Ta 3 －28・Ta 6 －30～36・D17－38・D32－39・H 3 －25・H 5 －17～18・Ta1－26～27・D17－40・D19－41・D31－42（1：3）
Ta 5 － 9・D 1 －37・一括－45（1：4）
D 1 －43・D20－44（1：2）
D 1 －46・D 9 －47・一括－48（1：1）

出土遺物

佐久市埋蔵文化財調査報告書

第１集　『金井城跡』
第２集　『市内遺跡発掘調査報告書1990』
第３集　『石附窯址群Ⅲ』
第４集　『大ふけ』
第５集　『立科Ｆ遺跡』
第６集　『上曽根遺跡』
第７集　『三貫畑遺跡』
第８集　『瀧の下遺跡』
第９集　『国道141号線関係遺跡』
第10集　『聖原遺跡Ⅱ』
第11集　『赤座垣外遺跡』
第12集　『若宮遺跡Ⅱ』
第13集　『上高山遺跡Ⅱ』
第14集　『栗毛坂遺跡』
第15集　『野馬久保遺跡』
第16集　『石並城跡』
第17集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』（１月～３月）
第18集　『西曽根遺跡』
第19集　『上芝宮』
第20集　『下聖端遺跡Ⅲ』
第21集　『金井城跡Ⅲ』
第22集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』
第23集　『南上中原・南下中原遺跡』
第24集　『上聖端遺跡』
第25集　『上久保田向Ⅳ』
第26集　『藤塚古墳群・藤塚Ⅱ』
第27集　『上久保田向Ⅲ』
第28集　『曽根新城遺跡Ⅴ』
第29集　『筒村遺跡Ｂ　山法師遺跡Ｂ』
第30集　『市内遺跡発掘調査報告書1992』
第31集　『筒村遺跡Ａ　山法師遺跡Ａ』
第32集　『東ノ割』
第33集　『聖原遺跡Ⅶ　下曽根遺跡Ⅰ　前藤部遺跡2』
第34集　『西一本柳遺跡Ⅰ』
第35集　『市内遺跡発掘調査報告書1993』
第36集　『蛇塚Ｂ遺跡Ⅲ』
第37集　『西一本柳遺跡Ⅱ　中西ノ久保遺跡Ⅰ』
第38集　『南下中原遺跡Ⅱ』
第39集　『中屋敷遺跡』
第40集　『寺畑遺跡』
第41集　『曽根新城遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ上久保田向遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ西曽根遺跡Ⅱ・Ⅲ』
第42集　『寄山』
第43集　『権現平遺跡　池端遺跡』
第44集　『寺添遺跡』
第45集　『市内遺跡発掘調査報告書1994』
第46集　『濁り遺跡』
第47集　『上芝宮遺跡Ⅴ』
第48集　『池端城跡』
第49集　『根々井芝宮遺跡』
第50集　『藤塚遺跡Ⅲ』
第51集　『寺中遺跡　中屋敷遺跡Ⅱ』
第52集　『坪の内遺跡』
第53集　『円正坊遺跡Ⅱ』
第54集　『市内遺跡発掘調査報告書1995』
第55集　『番屋前遺跡Ⅰ・Ⅱ』
第56集　『聖原遺跡Ⅹ』
第57集　『高師町遺跡Ⅱ』
第58集　『下穴虫遺跡Ⅰ』
第59集　『市内遺跡発掘調査報告書1996』
第60集　『曽根城遺跡Ⅱ』
第61集　『割地遺跡』
第62集　『野馬久保遺跡Ⅱ』
第63集　『西大久保遺跡Ⅲ』
第64集　『梨の木遺跡Ⅳ』
第65集　『中宿遺跡』
第66集　『中西ノ久保遺跡Ⅱ　仲田遺跡　寺畑遺跡Ⅱ』
第67集　『供養塚遺跡』
第68集　『前藤部遺跡』
第69集　『高山遺跡Ⅰ・Ⅱ』
第70集　『観音堂遺跡』
第71集　『市内遺跡発掘調査報告書1997』
第72集　『市道遺跡Ⅱ』
第73集　『西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ』
第74集　『五里田遺跡』
第75集　『八風山遺跡群』
第76集　『南近津遺跡』
第77集　『番屋前遺跡Ⅲ』
第78集　『蛇塚遺跡蛇塚古墳』
第79集　『四ツ塚遺跡Ⅰ』
第80集　『四ツ塚遺跡Ⅱ』
第81集　『薬師寺遺跡』
第82集　『市内遺跡発掘調査報告書1998』
第83集　『下聖端遺跡Ⅳ』
第84集　『榛名平遺跡』
第85集　『柳堂遺跡』
第86集　『市内遺跡発掘調査報告書1999』
第87集　『宮添遺跡』
第88集　『下曽根遺跡Ⅱ～Ⅶ　上芝宮遺跡Ⅱ～Ⅳ』
第89集　『川原端遺跡』
第90集　『梨の木遺跡Ⅲ』
第91集　『西一本柳遺跡　中長塚Ⅰ・Ⅱ　松の木遺跡Ⅰ・Ⅱ』
第92集　『辻の前遺跡Ⅱ　中仲田遺跡Ⅱ』
第93集　『入高山遺跡』
第94集　『聖石遺跡』
第95集　『市内遺跡発掘調査報告書2000』
第96集　『上木戸遺跡』
第97集　『久禰添遺跡』
第98集　『深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ』
第99集　『中道遺跡Ⅱ』
第100集　『野沢館跡Ⅲ』
第101集　『深堀遺跡Ⅳ』
第102集　『円正坊遺跡Ⅳ』
第103集　『聖原　－第１分冊－』
第104集　『聖石遺跡Ⅱ』
第105集　『曽根城遺跡Ⅲ』
第106集　『樋村遺跡Ⅱ』
第107集　『聖原　－第２分冊－』
第108集　『市内遺跡発掘調査報告書2001』
第109集　『西一本柳Ⅷ』
第110集　『佐久駅周辺土地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書』
第111集　『上ノ城遺跡』
第112集　『西赤座』
第113集　『西一本柳遺跡Ⅸ』
第114集　『供養塚遺跡Ⅱ』
第115集　『聖原　－第３分冊－』
第116集　『東久保遺跡Ⅱ・東久保古墳群1号墳・宮田遺跡Ⅱ』
第117集　『東五里田遺跡』
第118集　『東近津遺跡』
第119集　『野沢館跡Ⅳ』
第120集　『市内遺跡発掘調査報告書2002』
第121集　『後家山遺跡　東久保遺跡　宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ』
第122集　『聖原－第４分冊－』
第123集　『西村中遺跡』
第124集　『市内遺跡2003』

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第125集
一本柳遺跡群西一本柳遺跡Ⅻ
2004年12月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市大字中込3056
文化財課
〒385-0006　長野県佐久市大字志賀5953
TEL　0267-68-7321
印　刷　所　株式会社 中 信 社

報 告 書 抄 録

ふりがな 書名	にしいっぽんやなぎいせき 西一本柳遺跡XII
副書名	
巻次	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第125集
編著者名	冨沢一明
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2004．12．24
作成機関ＩＤ	
郵便番号	385－0006
電話番号	0267－68－7321
住所	長野県佐久市大字志賀5953
ふりがな 遺跡名	にしいっぽんやなぎいせき 西一本柳遺跡XII
ふりがな 遺跡所在地	ながのけんさくしいわむらだしもとよだ 長野県佐久市大字岩村田字下樋田
市町村コード	
遺跡番号	
北緯	Ｘ＝29180
東経	Ｙ＝－2880
調査期間	2004．04．03 ～ 2005．02．28
調査面積	280㎡
調査原因	集合住宅建設
種別	集落址
主な時代	古墳後期／中世
遺跡概要	住居址６（古墳後期５、奈良１）　掘立柱建物址２　竪穴状遺構６ 溝状遺構４　土坑38
特記事項	西一本柳遺跡の西端に当たる遺跡で、今回の調査地点では弥生時代中期・後期の集落址が検出されなかったことから、隣接する北西ノ久保遺跡の弥生集落と西一本柳遺跡の弥生集落は繋がらない可能性が推測できた。